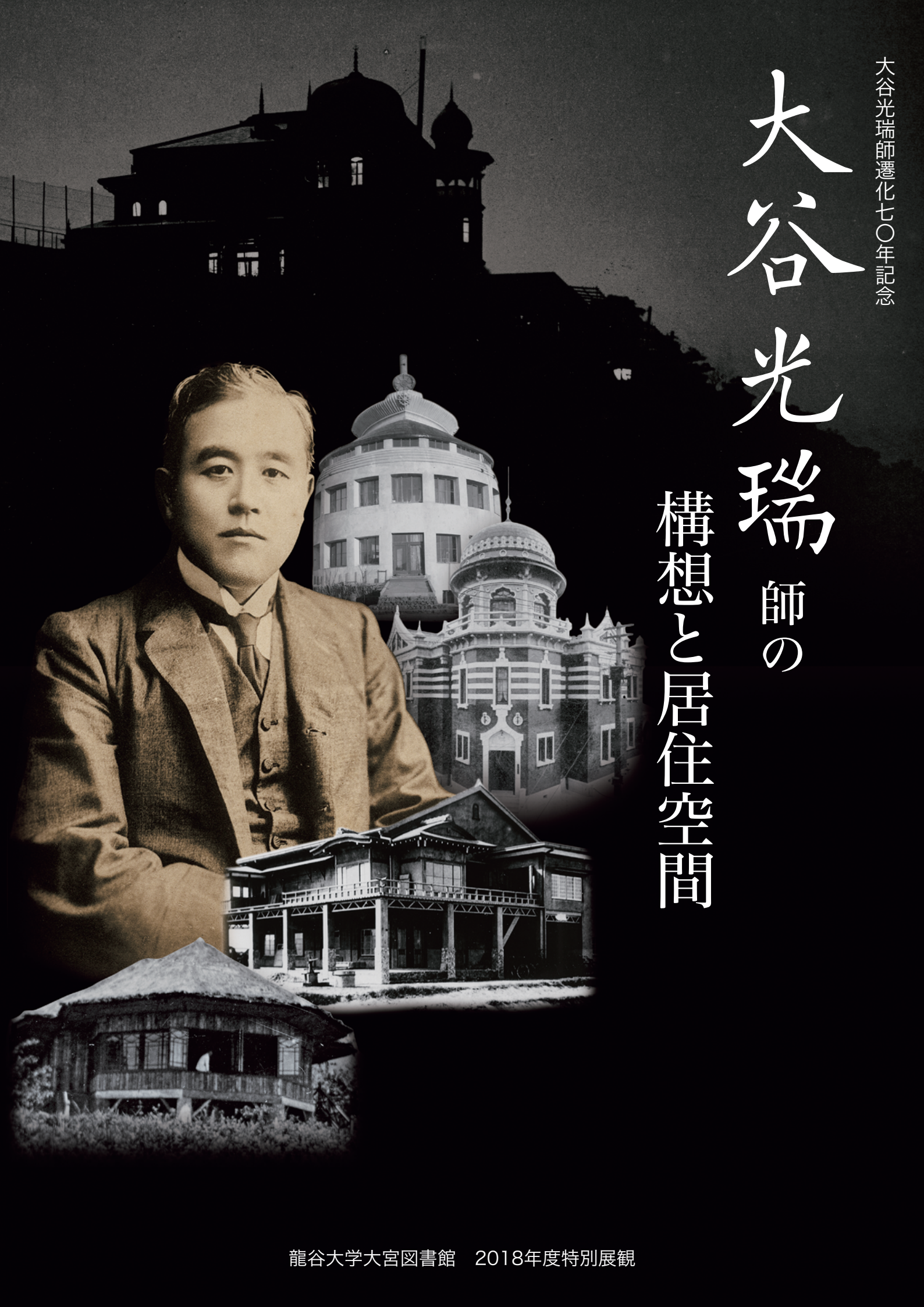
大谷光瑞師遷化七〇年記念

大谷光瑞師の構想と居住空間



龍谷大学大宮図書館　2018年度特別展観

龍谷大学大宮図書館　二〇一八年度特別展観

大谷光瑞師遷化七〇年記念

大谷光瑞師の構想と居住空間

特別展観の開催にあたって

龍谷大学図書館長
新田光子

龍谷大学大宮図書館二〇一八年度特別展観は、「大谷光瑞師の構想と居住空間」をテーマに開催いたします。

この展観は、大谷光瑞師（浄土真宗本願寺派第二十二世、鏡如宗主（一八七六―一九四八））没後（遷化）七十年にあたるのが本年であることから企画いたしました。龍谷大学大宮図書館では、これまでも光瑞師の大きな事績である「シルクロード大谷探検隊」展観を開催してまいりました。このたびは、明治・大正・昭和前期の、光瑞師が生涯をとおして住まわれた国内・国外の場所や建物が、大谷探検隊のみならず、農事試験場での農作物栽培・普及、あるいは女性門信徒の教化育成・学校教育などの大きな構想を生みだしたという発想にたって、文字どおり光瑞師の足跡を辿る企画です。

光瑞師の壮大な構想は、アジア・太平洋戦争の終結により滞在先の中国東北部大連の地で潰えました。戦後引き揚げの苦難をのりこえられた末に大分、別府を最期の住処とされましたが、それまでの足跡、思い描かれた構想の国際的スケールの大きさは、戦前・戦後の時代を通じて群を抜いていたかと思います。展観の限られた時空間の中ではありますが、ご来場いただきました皆様には、是非その一端を感じとっていただければと思います。

この展観開催にあたっては、学内・学外の関係者並びに校友の方々のお力をお借りしました。厚くお礼申し上げます。

二〇一八年一〇月

特別展観のみどころ

龍谷大学学長
入澤　崇

このたびの展観では、大谷光瑞師の多面性がみどころです。僧侶、地理学者、建築考案者、仏教研究者、教育者、農学者、経営者、都市計画者、陶磁器研究者など、光瑞師の活動は実に多彩です。いまなお大谷光瑞師を計るモノサシは誰の手許にもありません。あまりにスケールが大きく、捉えきれないのです。世界を見わたす広大な視野と慈悲心に基づく果敢なる行動は師の大きな魅力です。光瑞師の実像を解明するにはまだまだ時間がかかりそうですが、このたびの展観が解明進捗のきっかけとなれば幸いです。

近年、大谷光瑞師に対して海外から熱い視線が注がれています。光瑞師がなした多彩なる活動と「アジア復興」に向けての壮大なる構想に注目が集まっているのです。

例えば、トルコ。二〇一〇年、トルコでは「日本年」と銘打ち、さまざまなイベントが開催されました。その中のひとつの展覧会「三日月と太陽　イスタンブルの三人の日本人　山田寅次郎・伊東忠太・大谷光瑞」で、大谷光瑞師に関する資料が初めてイスタンブルで公開されました。同時に刊行された『土耳古と大谷光瑞』（エルダル・キュチュクヤルチュンと入澤との共著）は発売と同時に売り切れたと聞き及んでいます。トルコでの光瑞師に対する関心は高まっています。同年、ブルサでも、特別展「ブルサにおける初のトルコ・日本産業提携：ギョクチェン家と大谷光瑞」が開催され、好評を博しました。一九二〇年代に光瑞師はブルサで絹織物産業を興し、トルコ人と合弁会社を共同経営していたのです。経営者としての光瑞師の顔はこれまではっきりとは見えていませんでした。

今後も光瑞師に関する新たな資料が出てくることでしょう。そのとき、「多面体　大谷光瑞師」はどのような光芒を放つでしょうか。楽しみです。

二〇一八年一〇月

大谷光瑞師遷化七〇年記念

大谷光瑞師の構想と居住空間

目次

特別展観の開催にあたって　龍谷大学図書館長　新田　光子　2
特別展観のみどころ　龍谷大学学長　入澤　崇　3
大谷光瑞肖像写真（大正九年）　6
大谷光瑞略年譜　7
鏡如宗主肖像写真（明治四十四年）　8
一　鏡如宗主の宗祖親鸞聖人六五〇回大遠忌法要　9
『宗祖大師六百五十回大遠忌紀念帖』
『大遠忌写真帖』
『遠忌大観』
志田焼の寄進火鉢
二　大谷光瑞の建物　15
月見山別邸
月見山別邸絵葉書
二楽荘
『建築工芸叢誌』第二十冊（復刻版）
『二楽荘写真帖』（明治四十五年版）
『二楽荘写真帖』（大正二年版）
二楽荘絵葉書
二楽荘建築部材（煉瓦）
真宗信徒生命保険株式会社社屋（本願寺伝道院）
真宗信徒生命保険株式会社社屋絵葉書
看板「真宗信徒生命保険株式会社　被保人申込所」
旅順大谷邸
旅順大谷邸前の大谷学生集合写真
無憂園
「上海新無憂園増築立体図」
「在上海新無憂園増築工事仕様書」
環翠山荘
環翠山荘内部の集合写真
浴日荘
「浴日荘」名入り磁器皿
「浴日荘」名入り陶器鉢
逍遙園
築地本願寺
三　大谷光瑞の執筆活動　35
大谷光瑞の著書
四　実業家・研究者　大谷光瑞　37
都市計画
「観光都市建設私案」
出版・印刷へのこだわり
『大無量寿経義疏』の紙型
二楽荘絵葉書の写真凸版
農事者
三夜荘の養蜂道具
教育者
皆山なかアルバム
「大谷学生」関連の制服と付け襟
旅行用鞄（大谷光瑞使用）
考古学者

陶器破片（小笠原彰眞資料）
陶器嵌め込み扁額（中尾万三資料）
大谷光瑞書簡
『支那古陶瓷』
地理学者
シルクロード踏査地図
中央アジア地図
第二次・第三次大谷探検隊踏査地図
梵語研究者
鏡如上人御自筆梵語

五 特別出陳 ―― 56
三夜荘での歌会
三夜荘歌会関係者の短冊
『歌のしたかき』・『詠草』

六 大谷光瑞肖像と遺品 ―― 58
大谷光瑞肖像写真（明治三十五年）
大谷光瑞肖像写真（大正十年）
大谷光瑞肖像写真（昭和十年）
大谷光瑞肖像写真（昭和二十二年）
七条袈裟・横被・修多羅
大谷宗家寄贈目録
大谷光瑞書
大谷光瑞作水鳥形陶器
大谷光瑞常用湯呑

七 映像展示 ―― 62
二楽荘と大谷探検隊
鏡如宗主の五七日法要

【凡例】

◆本図録は、龍谷大学大宮図書館が主催する二〇一八年度特別展観「大谷光瑞師遷化七〇年記念 大谷光瑞師の構想と居住空間」の図録である。

◆本展の期間は、二〇一八（平成三十）年十月三日（水）～十月十三日（土）・十月十八日（木）である。

◆本展の企画、構成及び図録の編集は、三谷真澄（龍谷大学国際学部教授）、大木彰（龍谷大学大宮図書館）、和田秀寿（龍谷ミュージアム学芸員）が担当した。

◆本図録本文においては、大谷光瑞をはじめ関係各氏について、基本的に敬称を省略して記述した。また、本山本願寺を西本願寺と記した。

◆本図録に掲載した資料が陳列されていない場合がある。

◆本図録掲載順は展示順序と異なる場合がある。

◆展示資料のうち、参考展示など一部の資料については、本図録に収録していない。

◆本図録の執筆は、三谷、大木、和田の他、加藤斗規（大谷記念館研究員）、菅澤茂（工学院大学研究員）、掬月誓成（大谷記念館副館長）、岡田至弘（龍谷大学理工学部教授）が分担し、各文末に執筆者名（苗字）を記した。

◆資料名称は、原資料に付された名称を原則的に踏襲した。

◆各資料解説の表記は、資料名、時代、材質、法量、所蔵者の順に記す。法量の単位はcmである。所蔵者未記名は龍谷大学図書館蔵である。

◆写真の撮影は龍谷大学大宮図書館、和田が担当した。

協力者（敬称略・順不同）
雨森みちる、大原実代子、廣瀬覚、祐西寺、光立寺、照恩寺、皆山三商店、大谷記念館、印刷博物館、鍵長法衣佛具店、瑞門会、築地本願寺、浄土真宗本願寺派、本山本願寺、龍谷ミュージアム

大谷光瑞肖像写真(大正9年)　45歳　(『光寿』第1号)
ジャワ島周辺での農園開発が軌道に乗り出した頃で、旅順では大谷学生が各方面に進出し、
梵語の翻訳研究を中心とする光寿会も結成された。

大谷光瑞(鏡如宗主)は、浄土真宗本願寺派本願寺(西本願寺)明如宗主(大谷光尊)の長男として、明治9年(1876)誕生した。天資英邁にして気宇壮大、28歳で西本願寺第22世の法灯を継いだ鏡如宗主は、西本願寺教団の強化に尽力した人物である。

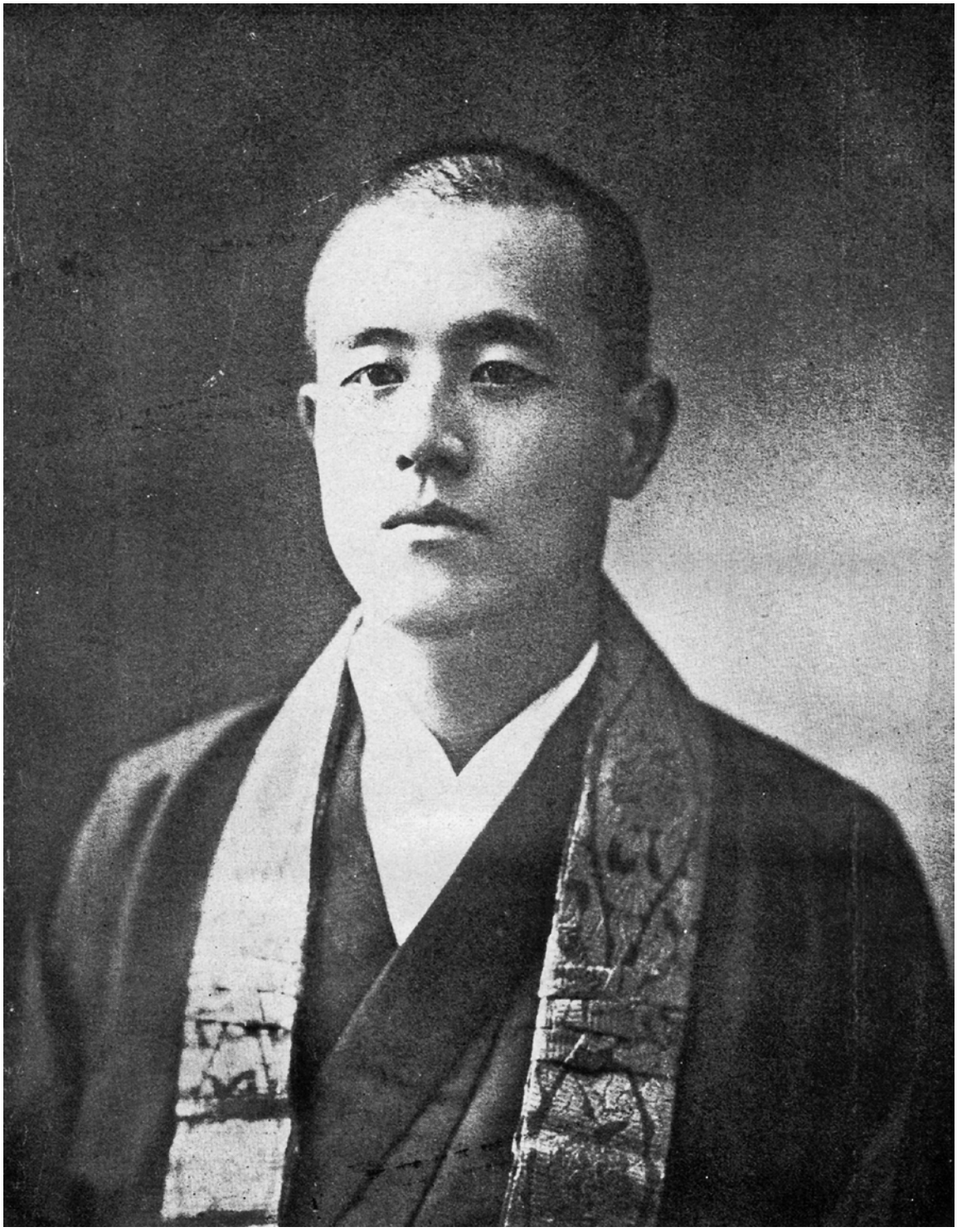
特に、インド、中央アジア等への仏蹟調査(大谷探検隊)を主宰し、多くの成果を上げた。さらに、西本願寺教団内における組織的強化、国内外の伝道展開をめざした宗主の施策は、近代西本願寺教団の発展に大きな影響を与えた。中でも、明治44年(1911)に盛儀の中に厳修された、宗祖親鸞聖人650回大遠忌法要は意義深いものであった。

そして、宗門以外にも光瑞の活動領域は広く多彩であった。生徒数300余名の中学校を設立し生徒の育成をはかり、私設の気象観測所を設け気象学に貢献、マスクメロンの栽培など園芸発展に寄与した。さらに、国内外に建設した別荘の設計にも自ら関与した。また、梵語経典の収集と翻訳を推進させ、講演、執筆に努め、中国古陶磁窯の発掘と研究を進め、アジア諸地域の農事開発(ゴム・コーヒー・香料植物・養蚕・織物・バラ等)に従事した。

大谷光瑞略年譜

明治9年（一八七六）　1歳　12月27日西本願寺第21世明如宗主（大谷光尊）の長男として誕生。幼名峻麿。
明治18年（一八八五）　10歳　12月得度式を厳修し、鏡如光瑞と称す。
明治19年（一八八六）　11歳　6月学習院に入学。
明治23年（一八九〇）　15歳　1月共立学校に入学。
明治31年（一八九八）　23歳　1月西本願寺鴻之間にて九條籌子と婚儀を挙げる。
明治32年（一八九九）　24歳　1月清国へ外遊。
12月インド仏蹟巡拝と欧州留学へ。
明治35年（一九〇二）　27歳　8月第一次大谷探検隊ロンドン出発。
明治36年（一九〇三）　28歳　1月明如宗主遷化により第22世鏡如宗主となる。
須磨月見山別邸竣工。
明治37年（一九〇四）　29歳　1月日露開戦を察し西本願寺に臨時部を設置。
明治41年（一九〇八）　33歳　第二次大谷探検隊出発。
明治42年（一九〇九）　34歳　9月二楽荘竣工。
明治43年（一九一〇）　35歳　第三次大谷探検隊出発。
明治44年（一九一一）　36歳　1月籌子裏方往生（享年30歳）。
3月宗祖親鸞聖人六五〇回大遠忌法要厳修。
明治45年（一九一二）　37歳　1月真宗信徒生命保険株式会社社屋（本願寺伝道院）竣工。
大正3年（一九一四）　39歳　5月西本願寺住職、西本願寺管長を辞任。
11月外遊の途につく。
大正5年（一九一六）　41歳　8月シンガポールにてゴムの栽培を始める。
大正6年（一九一七）　42歳　2月ジャワ島にて蘭領印度農林工業株式会社を設立。
大正7年（一九一八）　43歳　旅順大谷邸（策進書院）にて大谷学生を育成。
セレベス島（耕雲山荘）にてコーヒー園を経営。
大正11年（一九二二）　47歳　1月上海無憂園竣工。雑誌『大乗』創刊。
大正13年（一九二四）　49歳　ジャワ島にてシトロネラ栽培（環翠山荘）を始める。
大正14年（一九二五）　50歳　上海郊外に新無憂園を新築。
養蚕の桑樹を植樹。
昭和元年（一九二六）　51歳　トルコにて絹織物、染織、バラ園を経営。
昭和2年（一九二七）　52歳　大観荘（パノラマ農園）購入。
昭和4年（一九二九）　54歳　中国古陶磁窯の調査開始。
昭和5年（一九三〇）　55歳　6月光瑞会を設立。
昭和6年（一九三一）　56歳　2月『食』刊行。
5月上海別院竣工。
昭和7年（一九三二）　57歳　4月『支那古陶瓷』刊行。
昭和9年（一九三四）　59歳　7月築地本願寺本堂竣工。
10月大連浴日荘竣工。
12月『大谷光瑞全集』刊行開始。
昭和10年（一九三五）　60歳　10月『台湾島之現在』刊行。
昭和11年（一九三六）　61歳　9月『光瑞縦横談』刊行。
昭和14年（一九三九）　64歳　6月『大谷光瑞興亜計画』刊行開始。
昭和15年（一九四〇）　65歳　11月高雄逍遥園竣工。
昭和17年（一九四二）　67歳　11月『蘭領印度地誌』刊行。
昭和19年（一九四四）　69歳　9月『熱帯農業』刊行。
昭和22年（一九四七）　72歳　12月内閣顧問就任。
2月大連から帰国。
別府市亀川国立病院へ入院。同市鉄輪別邸に移る。
「観光都市建設私案」草稿。
昭和23年（一九四八）　73歳　10月5日17時45分、鉄輪別邸にて遷化。
11月8日大谷本廟にて葬儀。
昭和25年（一九五〇）　別府市大谷公園に石碑「光瑞上人遷化之處」建立。
昭和29年（一九五四）　10月鏡如宗主七回忌法要。以降回忌法要厳修。
平成10年（一九九八）　10月龍谷大学大宮図書館にて「鏡如上人鑽仰展」開催。
3月大谷光瑞没後50周年記念シンポジウム「大谷光瑞師と中央アジア探検」開催（別府、大谷記念館主催）。
平成21年（二〇〇九）　5月大谷光瑞没後60周年記念シンポジウム「近代東アジアの人的交流　光瑞上人を支えた人々」開催（京都、大谷記念館主催）。

大分県別府市鉄輪の大谷公園内にある石碑「光瑞上人遷化之處」と大谷探検隊顕彰碑



鏡如宗主肖像写真　36歳（明治44年）『遠忌大観』

一　鏡如宗主の宗祖親鸞聖人六五〇回大遠忌法要

西本願寺において五十年に一度、宗祖親鸞聖人の遺徳を偲び、報恩の思いを表す大規模な法要が勤められる。これを「大遠忌」と称し、鏡如宗主の時に六五〇回大遠忌法要が厳修された。明治四十四年（一九一一）に修行されたこの法要は、西本願寺史上空前の規模となり、総参拝者数一〇〇万人を越えるものとなった。参拝者の受け入れにあたっては、阿弥陀堂から御影堂を取り囲むように掛出（かけだし）が設けられ、堂内収容人員二万五〇〇〇人に達した。また境内には集会所や団体参拝事務所、茶所に新聞記者の詰所、太鼓楼に京都免疫官と警察官幹部出張所、門前広場には仮設郵便局、救護所などが設けられた。さらに鉄道院と連携して団体参拝者専用の臨時乗降駅「梅小路停車場」（現京都鉄道博物館付近）が建設された。

この大遠忌法要の成功は、宗主を頂点とする近代教団の組織化の一つの到達点であった。そこには、宗主の仏教の大慈悲を伝える布教伝道の強い思いがあったことは確かである。

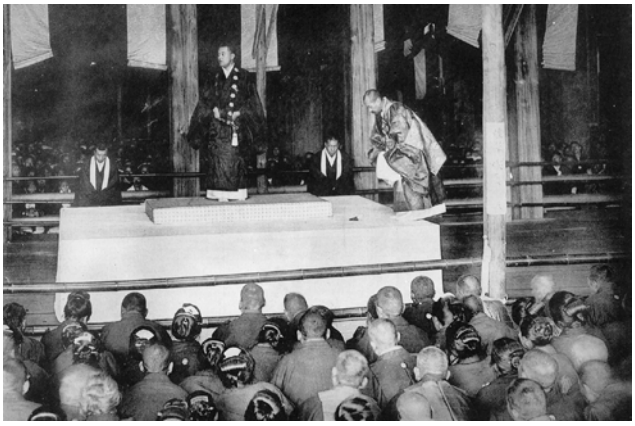
『宗祖大師六百五十回大遠忌紀念帖』

明治四十四年（一九一一）十月十五日
紙本冊子
縦二六・六×横三七・七

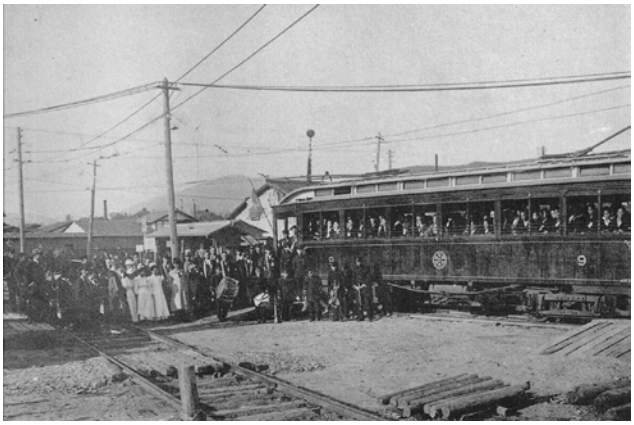
体裁はB四横版変形である。大谷光瑞と大谷光明の「法水流遠」と題する漢詩を巻頭写真に組み、法要風景（四十四葉）、日本と海外の別院、仏教大学（現龍谷大学）、旧制平安中学校（現龍谷大学付属平安中学校・高等学校）の建物写真で編集されている。一頁内での写真配置は一葉、二葉、四葉に分かれて構成され、図版間に挿入されたグラシン紙（パラフィン紙）に写真キャプションが記されている。奥付に非売品と記され、来賓者への土産用として配布された写真帖と考えられる。著作兼発行人は大八木大行である。大八木は明治三十五年に本願寺枢密部に属し、重要文書の記録や「本山録事」などの編纂に関わっていた。

（和田）

帰還団体参拝者の梅小路駅の様子



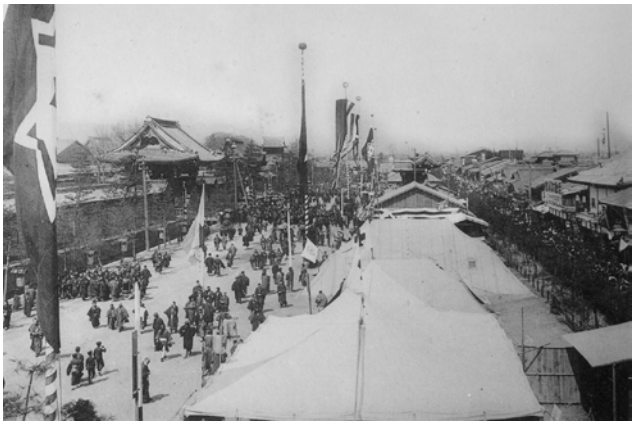
団体参拝者に面接する鏡如宗主



京阪電車から降りる団体参拝者

掛出を通過する鏡如宗主

旧仏教大学門前に集合する団体参拝者



西本願寺門前の様子

旧制平安中学校運動場の大天幕

境内の様子

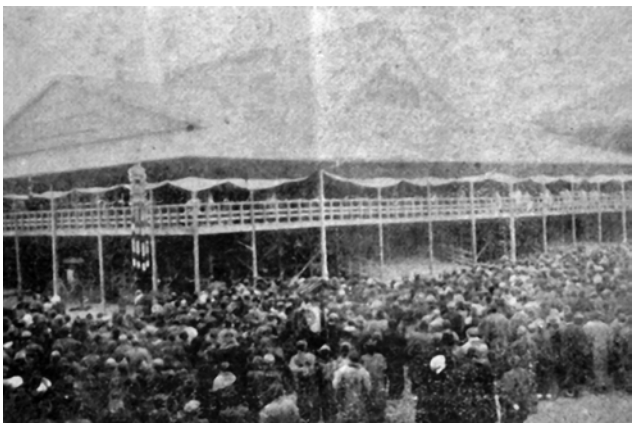
『大遠忌写真帖』

明治四十四年（一九一一）四月七日
紙本冊子
縦一八・五×横二五・四

冊子はA四横版で、巻頭図版に大谷尊由（積徳院）の書「法水流遠」を含め、四十八葉の写真図版から構成されている宗祖親鸞聖人六五〇回大遠忌法要の記念写真帖である。堂内の法要風景はもちろんのこと、境内に設置された仮設建物や群集の様子、そして富山県高岡から寄進された重さ六十キロもある金地菊文様の大蠟燭や二楽荘で栽培された花卉類の写真も掲載されている。これらの写真は『遠忌大観』に解説付きで再録されている。発行所は大遠忌法要に伴って特設された大遠忌日報社である。この社は、法要の本願寺各部署の連絡や法要の各般の事項を漏れなく集約し、日刊紙『大遠忌日報』を発刊した。

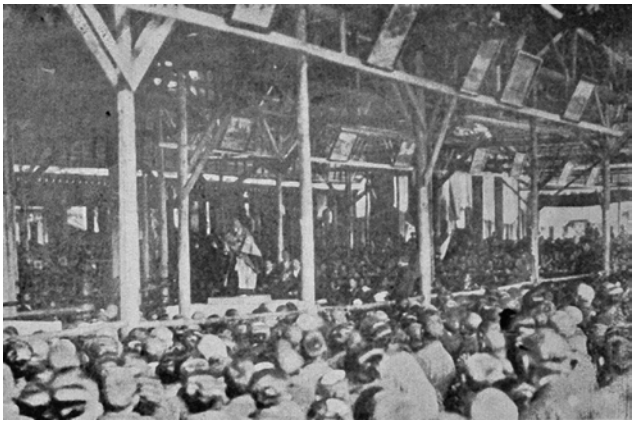
（和田）

門前広場に建つ真宗信徒生命保険株式会社設置の救護所

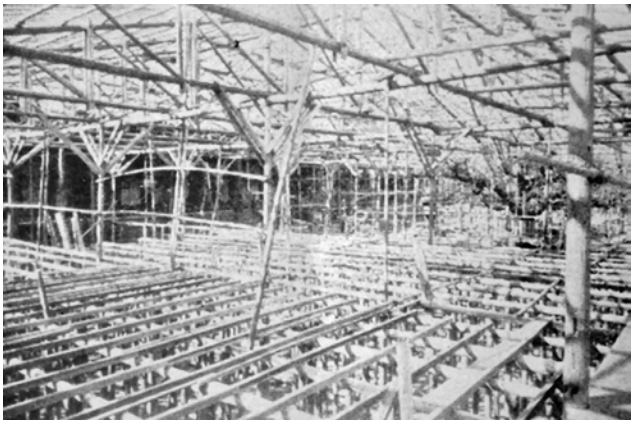


掛出前の様子

門前広場における仏教大学学生の天幕伝道

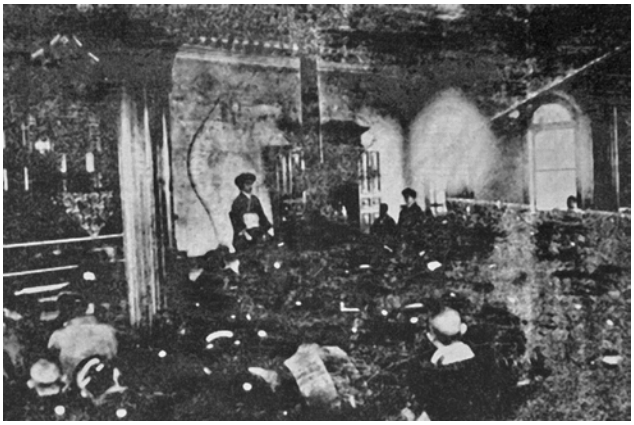


参拝者に対して面接する大谷光明裏方（大谷紝子）

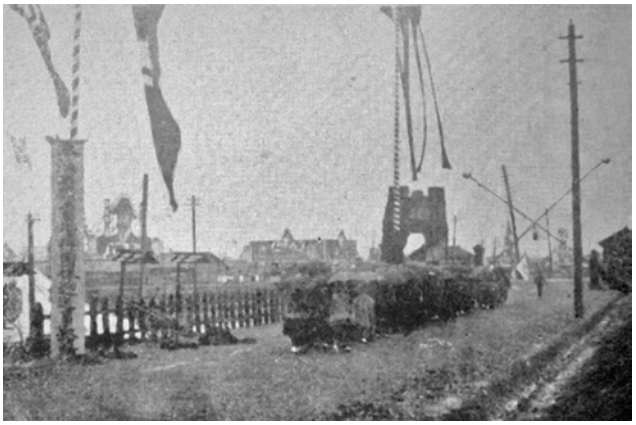


御影堂前の掛出建設の様子

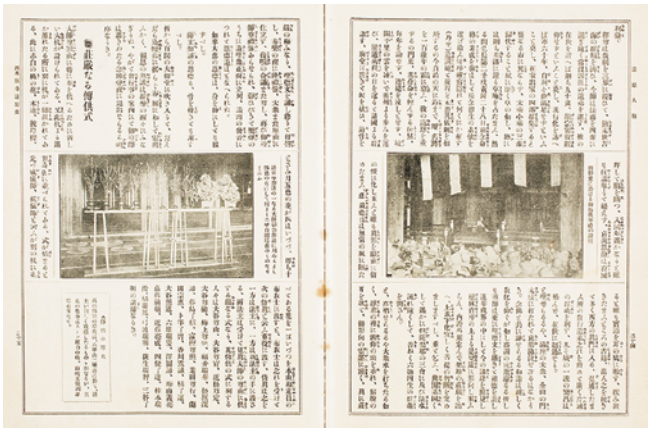
梅小路駅の団体参拝者



仏教大学講堂（現龍谷大学大宮学舎本館）で挨拶する九條武子



梅小路駅から六条へ向かう団体参拝者



『遠忌大観』

明治四十四年（一九一一）十一月十日
紙本冊子
縦二六・七×横一九・〇

黒衣輪袈裟着用の鏡如宗主の肖像写真を巻頭図版に組み、「西本願寺遠忌史」と「東本願寺遠忌史」に分けられB五縦版で構成されている。大遠忌法要の準備から詳細な解説で綴られ、法要に関連した僧侶の肖像写真も多数掲載されている。また、法要時のエピソード的なコラムが挿入されている。例えば法要に参拝した外国人が「一萬の群集が一堂に集会し、而も静粛なるには最も感嘆し、世界一の光景なるべしと激賞せり」と述べたことや、書院にある狩野派の描いた襖絵に賽銭を投げる参拝者がおり、監視の僧侶が「嗚呼常識を以て判断すべからず」と大声で叫んだこともあった。発行所は中外日報社で特製三円、上製二円六十銭で販売された。（和田）

志田焼の寄進火鉢

明治時代
磁器
直径二二・〇×高さ二五・三
個人蔵

この円筒形火鉢は、明治四十四年（一九一一）に厳修された宗祖親鸞聖人六五〇回大遠忌法要に伴い寄進された志田焼の磁器である。志田焼は、十八世紀に天草陶石を使った磁器の生産が、現在の佐賀県嬉野市塩田町周辺で始められた。高級磁器を生産する有田地区に対して、志田焼は大衆向けの日用雑器を大量に生産する窯場して発展した。さらに幕末には、肥前磁器における志田焼の染付の占める割合が半数近くあったと言う。火鉢は段状に成型され、上段には下り藤と蓮文が巡らされ、段の凹部に龍文が描き込まれている。また、上段には「肥前国武雄町 正法寺門徒 肥前国志田西山 寄進者 製造人 鶴鹿太郎」と記され、寄進品として一〇〇口が生産された。（和田）

二　大谷光瑞の建物

大谷光瑞は生涯多くの建築物を考案し設計した。二楽荘本館が焼失した時、記者に対して光瑞は「住宅は住む人が設計すべしと言う私の主義から、全部私が設計した建物です。建てる前は楽しみで、一年もすると何の愛着も感じなくなるような、私の性分として古いことはよく覚えていません」とコメントを残している。光瑞の建築に対するこだわりを感じさせる言葉である。近年、光瑞が関連した建物のうち、現存する真宗信徒生命保険株式会社社屋（現本願寺伝道院）、築地本願寺本堂、台湾高雄の逍遥園を建築学の視点から検討を加える試みもなされている。

月見山別邸（つきみやまべってい）

大谷光瑞は、生活環境に恵まれた神戸須磨（すま）の地（現神戸市須磨区 神戸市立須磨離宮公園）に、敷地面積三万坪に及ぶ広大な別荘、須磨月見山別邸を明治三十六年（一九〇三）に建築する。この地で大谷探検隊が日本へもたらした資料の、本格的な整理や研究が初めて展開された。そして、光瑞を中心に、総勢約二十数名の精鋭がこの活動に従事した。敷地にはテニスコートや調馬場が整備されていた。また、果樹園や温室が設置されたことから、園芸に関連する研究も行われていたと考えられる。しかし、明治四十年、この地は明治天皇の別荘地（武庫離宮）として活用されることになり、用地を宮内省に売却したため、実質の活動期間は数年という短命であった。

（和田）

月見山別邸絵葉書（つきみやまべっていえはがき）

明治時代
紙本
縦九・〇×横一四・一
個人蔵

光村合資会社（現光村印刷株式会社）神戸支店発行の「本願寺須磨月見山別邸」絵葉書（現在十一種類を確認）には、月見山別邸の各建物や付属施設が構図として組まれている。別邸の中心施設が写り込んでいる「庭園之全景」には、池の掘削土を利用し高台が整形され、和館四棟と洋館一棟が配置されている。また、写真には架線柱が見られ、電話や電灯の設備があったことが考えられる。別邸のあった須磨町で電灯が供給されたのは明治三十五年（一九〇二）九月、電話交換業務が開始されたのは明治三十七年のことであり、早い段階から生活関連の機器を完備していたことになる。

須磨周辺は良好な自然環境から景勝地として有名で、保養地や別荘として発展し、須磨寺や須磨遊園地等もあった。そのため観光者向けに「須磨名所」として多くの絵葉書が発行された。その中には須磨月見山別邸の構図も確認されている。

（和田）

二楽荘

建築家、伊東忠太が自ら現地を訪れ「本邦無二の珍建築」と称し、当時の紙面には「建築界の異彩」とも記された二楽荘は、明治四十二年（一九〇九）夏、兵庫県武庫郡本山村岡本（現神戸市東灘区）の六甲山麓にその全貌を現した。

日本初とも言われる蒸気式のケーブルカーで山腹に登ると、そこにはランドマークである二楽荘本館がある。本館はインドのタージ・マハルを模したと言われる建物で、館内には各国の名前が付けられた部屋と調度品が配置されていた。大谷光瑞の壮大な構想を理解するのにふさわしい建物である。

さらに、荘内には武庫仏教中学、園芸部、私設六甲山測候所、出版部、印刷部などが設置され、多くの事業が展開していた。また、大谷探検隊による将来品の整理研究、展示も行われていた。まさに二楽荘は総合学術研究機関と言えよう。

（和田）

二楽荘本館とテニスコート（『二楽荘写真帖』明治45年版）

『建築工芸叢誌』第二十冊（復刻版）

大正二年（一九一三）九月十五日
紙本冊子
縦三七・二×横二六・二

冊子には「二楽荘の建築」（東京帝国大学工科大学教授・伊東忠太記）と「二楽荘建築工事概要」（西本願寺技師・鵜飼長三郎記）が掲載されている。伊東は二楽荘が「大谷伯の創意と鵜飼氏の設計監督とに由て完成せる」と述べ、その建築を「本邦無二の珍建築」と評している。伊東は二楽荘建築に、鵜飼の希望により助言者として関与し、伊東の残した調査日記（『野帳』）には、伊東が二楽荘に訪問した記載がある。

一方、鵜飼の報告は、二楽荘本館の建築概要が専門的かつ詳細に記され、二楽荘建築に関する重要な記録である。特に本館壁内には防寒、避暑等の目的で籾殻を充填していた記載や、外壁表面には縦横網型に電導線を配し、建物側壁に嵌め込まれた鉄板に接続し、電流を地中に流すような設備記録が見られ、落雷による種々の被害を避ける工夫が取られている。

冊子の挿図写真はコロタイプ版で解像度が高い。そのため「支那室」、「英国エリザベス朝式食堂」（「英国封建時代室」）、「印度式居室」（「印度室」）に写り込んだ、大谷探検隊将来品の資料の比定も進められている。

（和田）

『二楽荘写真帖』（上段）

明治四十五年（一九一二）三月十五日
紙本冊子
縦二七・〇×横三七・八

二楽荘の竣工及び武庫中学（後武庫仏教中学）の開校を記念して作成されたコロタイプ版の写真帖である。書名は記されていないが、龍谷大学図書館蔵版（上原芳太郎寄贈）には、添付された縦罫線入り用箋に「二楽荘写真帖」（上原直筆）と記されている。写真帖は、B四横版変形で、二楽荘本館や武庫中学関連の写真が五十葉組まれ、各写真には、キャプションが記されたグラシン紙（パラフィン紙）が掛けられている。竣工当時の二楽荘内の施設の様子を知る重要な写真帖である。また、二楽荘から眼下を見下ろす遠景写真には、田畑の広がる阪神間の景観が写り込み、二楽荘周辺の写真には水車産業を窺わせる水車場が見られ、明治末期の阪神間の状況を知る上でも貴重な資料と言える。表紙には二楽荘本館夜景と海に浮かぶヨットのデザインが箔押しされている。発行所は原色版印刷を完成させた光村印刷株式会社である。（和田）

『二楽荘写真帖』（下段）

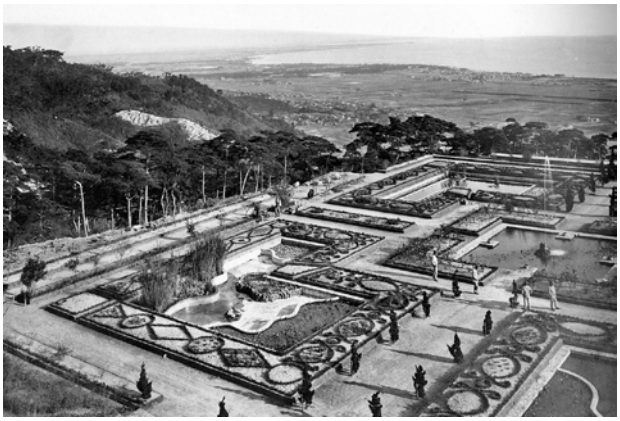
大正二年（一九一三）
紙本冊子
縦一五・二×横二二・二
個人蔵

A五横版で奥付は見られないが、濃灰色の表紙に銀文字で「二楽荘写真帖」と記されている。この写真帖には、三十頁、三十九葉の写真が納められている。写真はすべて二楽荘内に設置された武庫仏教中学（旧武庫中学）に関連するもので、文部省認可の仏教中学として大正二年（一九一三）に新設した武庫仏教中学の開校を記念して作成されたと考えられる。この写真帖には、武庫仏教中学の教室、寄宿舎、水浴場、食堂、図書室、博物標本室、薬局などの諸施設が見られる。また、明治四十五年版『二楽荘写真帖』には見られなかった六甲山測候所、印刷所、牧場も構図として組まれており、二楽荘内の諸活動を知る上で重要な資料である。なお、この写真帖は二楽荘印刷所で製版されたと考えられる。（和田）

『二楽荘写真帖』（明治45年版）一部

本館アラビア室

二楽荘遠望

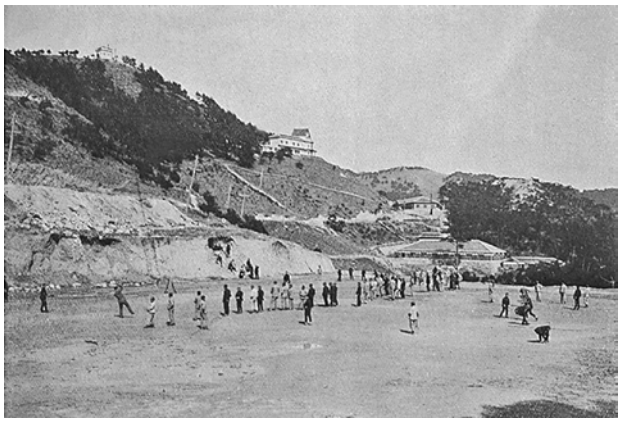


本館前庭

二楽荘全景

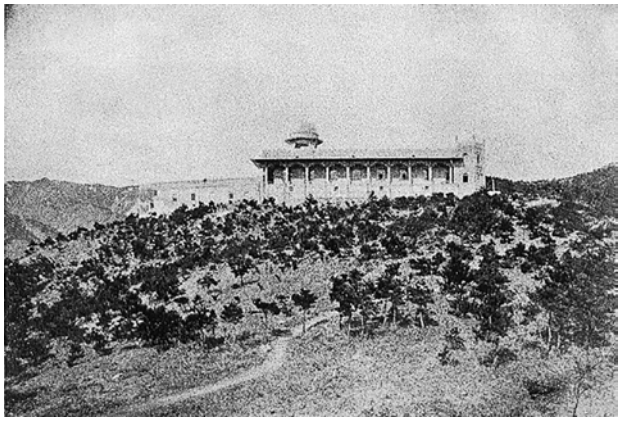
『二楽荘写真帖』（大正2年版）一部

武庫仏教中学事務所



武庫仏教中学の運動場

二楽荘園芸部牧場



含秀居

二楽荘絵葉書

明治～大正時代
紙本
各縦九・〇×横一四・一
個人蔵

二楽荘が機能していた頃、二楽荘本館及びその付属施設や大谷探検隊将来品、武庫仏教中学などを構図とした多くの絵葉書が発行された。これらの絵葉書は、二楽荘本館の竣工記念として外部に発注したものや、二楽荘印刷所で製版されたものもある。現在確認できる二楽荘関連の絵葉書は、版式、写真色調、表面の和文題字、欧文題字、区分罫線、発行所の記載などから二十三種類に分類される。版式は、凸版、コロタイプ版、原色版の三種類がみられる。また、写真の構図は、二楽荘関連(二十四種類)、武庫仏教中学関連(九種類)、将来品関連(十四種類)の三項目に区分できる。中には一冊の絵葉書帖(七枚組)を構成していたと考えられる資料もある。特に原色版の絵葉書は四種類(袋含む)確認でき、二楽荘本館各部屋の彩色復元に迫ることのできる資料と言える。

(和田)

二楽荘建築部材(煉瓦)

明治時代
陶質
縦一〇・九×横一二・三×高さ五・七
個人蔵

二楽荘内の建物には、その基底部や壁体などに多くの煉瓦が使用されていた。二楽荘本館を建てる時にも、駄賃代わりに学童が煉瓦を麓から運ぶ様子が当時の新聞に掲載されている。

二楽荘内の施設が建てられた時期に、近畿地方で操業していた煉瓦製造会社は大阪窯業株式会社、岸和田煉瓦株式会社、堺煉瓦株式会社、日本煉瓦株式会社などであり、大阪を中心に稼働していた。二楽荘周辺から、かつて採集された煉瓦片を見ると、刻印が押印されている資料がある。この刻印から、二楽荘で使用された煉瓦は、大阪方面を中心に複数の煉瓦会社から供給されていたことが分かる。なお、この煉瓦は、かつて二楽荘本館付近から採集され、二楽荘本館の法量復元の一助となった資料である。

(和田)

真宗信徒生命保険株式会社社屋（本願寺伝道院）

宗祖親鸞聖人六五〇回大遠忌法要を記念して鏡如宗主の依頼により、当時の東京帝国大学教授の伊東忠太が設計し、明治四十五年（一九一二）に真宗信徒生命保険株式会社の社屋として新築された。建築技師は二楽荘の建築主任であった鵜飼長三郎である。外観は総煉瓦造り風のタイル張り、インド・サラセン風のドーム屋根を持つ八角堂や、周囲の石柵には架空の珍獣が彫り込まれた石像品を見る。屋根は銅板葺き、屋根骨組みは木造、屋根の装飾には一見石材に見えるテラコッタ（装飾用の陶器）を用いている。

宗主辞任後は経営主体が久原房之助に移り、社名を改名しながら、戦後は京福電鉄本社や関西電力も、その一部を使用した。そして、昭和三十三年四月から本願寺布教研究所の施設として利用され、一部はあそか診療所としても活用された。昭和三十七年（一九六二）四月二十四日には、新たな教学、伝道を構築する目的で「伝道院」が開院した。その後、昭和六十三年（一九八八）五月には浄土真宗本願寺派教学本部（伝道院）として、京都市指定有形文化財に指定され、平成二年（一九九〇）四月には名称も変更され、現在の「本願寺伝道院」に至った。

この建築は、木造の伝統を進化させて石材や鉄材で造るという伊東忠太の「建築進化論」の実証の一つであった。外観や内装には多様なモチーフが取り入れられ、特に部屋の床や天井は、多種多様な異なるデザインで仕上げられている。

（和田）

真宗信徒生命保険株式会社社屋絵葉書

明治四十五年（一九一二）四月一日
紙本
縦九・二×横一四・五
個人蔵

二楽荘本館の竣工式を終えた二ヵ月後の明治四十二年（一九〇九）十一月から、真宗信徒生命保険株式会社社屋の新築工事予定地の整地作業が行われた。そして、翌年三月六日の起工式を終え、本格的な建築工事が着工された。その後、建築技師の鵜飼長三郎は、伊東忠太との建築に関する協議を重ねる中、明治四十五年（一九一二）一月三十一日に竣工式を終え、鏡如宗主、大谷尊由執行長の臨席のもと、落成式が四月一日に挙行された。その時の社屋前の様子は「時ならぬ人馬往来の賑ひ繁く社前は市をも為さんばかり、殊に東西南北の隣町は我社の徽章を染め抜きたる小旗、紅燈にて戸毎の軒を飾られたれば一層の美観を呈したりき」と記されている。この絵葉書は、落成記念に配布されたもので、絵葉書端にミシン目が見られることから、冊子仕立ての絵葉書帖の一葉と考えられる。（和田）

看板「真宗信徒生命保険株式会社　被保人申込所」

明治時代
木製
縦二六・五×横三七・二
個人蔵

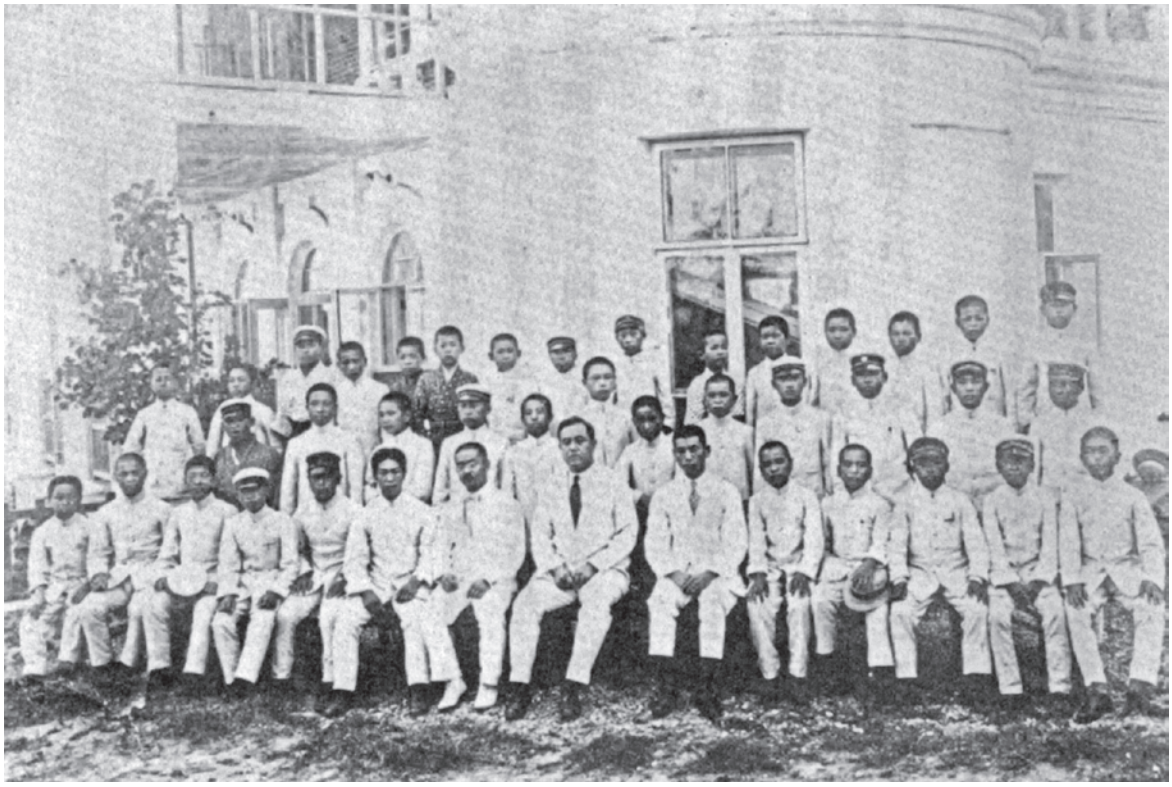
真宗信徒生命保険株式会社は、鏡如宗主の父、明如宗主（大谷光尊）の時代、明治二十八年（一八九五）四月に設立された。経営には浄土真宗本願寺派の門信徒があたり、初代社長に小西酒造の当主であった小西新右衛門が就いた。また、監査役には伊藤忠財閥を築き上げた伊藤忠兵衛が迎えられた。この看板は、当社の代理店に掲げられたものと考えられる。代理店は開業後九日目に、早くも大阪府南河内郡高鷲村（現羽曳野市）に代理店が設置され、明治三十七年（一九〇四）末には五〇二店舗まで拡大した。この看板に刻印されている三条単位の、二つが交叉する社章「六条交叉」は、六字尊号と所在地である六条を意味している。

（和田）

旅順大谷邸（りょじゅんおおたにてい）

大谷光瑞は、大正三年（一九一四）の宗主辞任以降、外遊の途についた。光瑞の旅順滞在にあたり「関東都督府」が斡旋し、ロシア時代の洋館を改修したのが「旅順大谷邸」である。同邸は、旅順新市街吾妻町（遼寧省旅順口区太陽溝靠山街）に位置し、旅順港と新市街を見下ろす丘の上にある。新市街には、旧関東都督府や旧関東軍総司令部、旧旅順ヤマトホテル、旧粛親王府の他、当初探検隊将来品が保管された旧露清銀行旅順分行（千歳倶楽部）、旧満蒙物産館（探検隊将来品を展示、後に関東庁博物館考古分館となる。その後旅順図書館となり大谷文庫を収蔵していた。）等の建築物が現在も残っている。また現在も多数の探検隊将来品を所蔵展示する旅順博物館も新市街に所在する。光瑞は、中国の避暑地は「大連、旅順を最とし、青島之に次ぐ」と述べ同地を好んでいた。また同邸では橘瑞超（たちばなずいちょう）を中心に探検隊将来品の整理が行われており、さらに子弟教育の為の策進書院（さくしんしょいん）が設けられた。旅順滞在中の光瑞を釈宗演（しゃくそうえん）（臨済宗僧）や高梨光司（たかなしこうじ）（新聞記者）が訪問している。建物は、火災に遭い廃屋となっていたが現在は修復されている。（加藤）

旅順大谷邸（修復前）



『大谷光瑞アルバム』

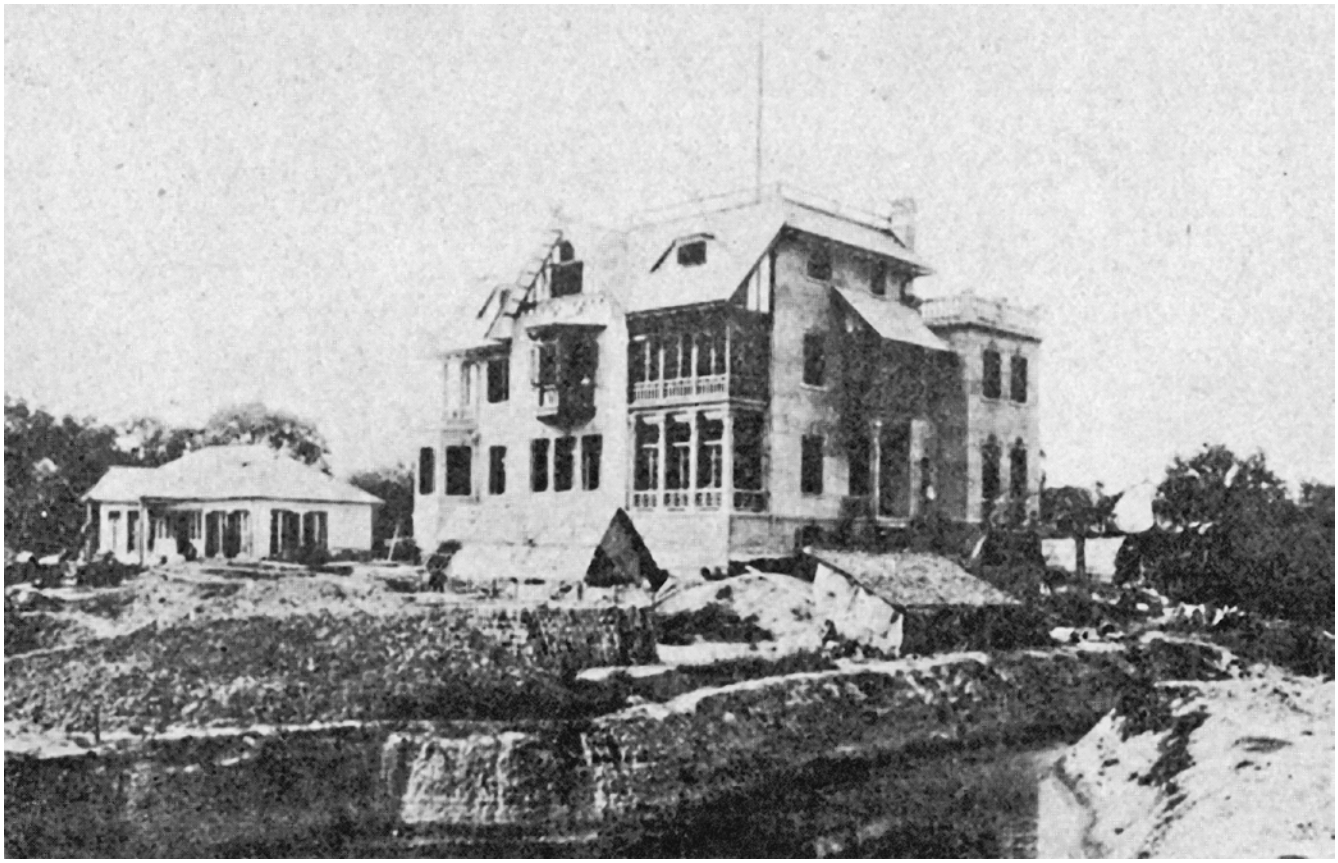
旅順大谷邸前の大谷学生集合写真

大正七年（一九一八）に武庫仏教中学以降初めての「大谷学生」が日本で採用され約四十名が旅順に渡り「策進書院」に学んだ。授業は、中国、インド史、世界地理は大谷光瑞自らが教鞭を執り、堀賢雄（一八八〇～一九四九）は英語、関東都督府農業技師木下は農業、関東都督府嘱託野波静雄はドイツ語、下中弥三郎（後の平凡社社長）は西洋史を講じ、仁本正恵、廣瀬了乗も教壇に立ったという。ある学生が「ゲルマンの古城に似たる」と回想した大谷邸を背景に、学生に囲まれ中央に光瑞や第一次大谷探検隊員であった堀賢雄、抜群の語学能力により光瑞に信頼された精舎昌美（一八九八～一九二一）、仁本正恵の姿が見える。

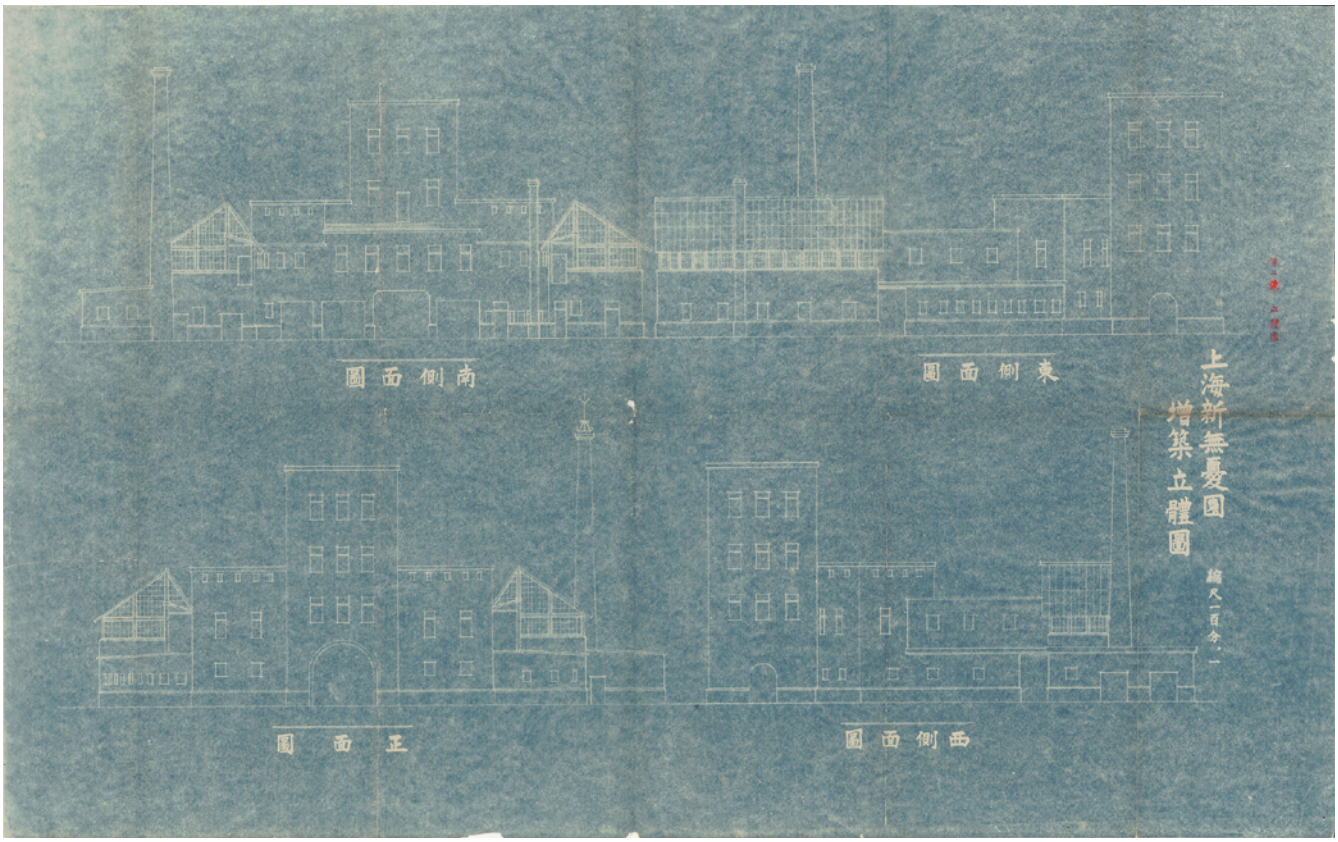
（加藤）

無憂園（むゆうえん）

大正十一年（一九二二）一月、上海の共同租界シンガポール路（現余姚路）に無憂園が竣工した。約一万坪を有する敷地には洋館三階建の本館「濯足堂（たくそくどう）」と呼ばれる建物や「大谷学生」の教育、研究施設である「策進書院（さくしんしょいん）」の他、庭園の四分の一を占める「滄浪池（そうろうち）」と称する池等があった。池畔には三〇種以上の日本桜を移植し、春には観桜会も催された。「無憂」は、アショーカ（無憂）樹に由来し、園の門標には光瑞自ら命名した「ビラ・アソカ」を揚げたという。園内の「策進書院」では梵語研究と経典訳出が行われ、併設した「大乗社」では月刊雑誌「大乗」が刊行された。ところで、この無憂園には当時珍しかった無線電信機が設置され、大正十二年（一九二三）の関東大震災の状況がいち早く伝わり、海を渡り救援活動が迅速に展開されたと記録されている。なお、現在、この無憂園はすでになく、跡地に建設された高層マンションが平成二十二年（二〇一〇）十一月十五日に火災にあったことで世界に知られることとなった。（三谷・和田）



大正11年の上海無憂園の本館「濯足堂」と「策進書院」（『大乗』第1巻第2号）



「上海新無憂園増築立体図」

「上海新無憂園増築立体図」、「在上海新無憂園増築工事仕様書」

大正時代
紙本
「上海新無憂園増築立体図」縦五六・三×横九〇・〇
「在上海新無憂園増築工事仕様書」縦二四・三×横一六・九

大正十四年（一九二五）秋に上海郊外の越界路に鉄筋コンクリート造の新無憂園（第二無憂園）を新築した。大正十一年（一九二二）一月に竣工した旧無憂園周辺は、排日運動が激化し環境が悪くなったため、新無憂園に移転したと言われている。この工事仕様書は建築に際しての建築業者から提出されたものと考えられ、「上海新無憂園増築立体図」とセットをなす。

新無憂園の面積は建物、庭園、園芸施設を合わせ一万坪を有し、建坪総数は三〇〇坪を測る。この数値は旧園とほとんど変わらない。学生室を完備した主要建物は四階建で、一階部分は車庫、二階は勉強室、学生室、温室、三・四階は学生室で構成されている。建築構造で特記することは、カーテンウォール（建築構造上取り外し可能な壁）で仕上げられ、空洞壁床二重式の防音装置付である。また、殺菌効果を高めるためだろうか、紫外線のみを透過させる窓硝子を利用するなど、当時最新の資材を建築に応用していた。園芸施設には桑園を造園し、日本から桑を移植し技師も日本から招聘した。青木文教はこの建物を概評し「無駄がなく、一々科学的基調の本に立ち経済的衛生的で、能率増進設備を考へ、所謂猊下の理想的建築と一言に盡す事ができる」と記している。起工式は大正十四年六月二十九日であった。

（和田）

『在上海新無憂園増築工事仕様書』

環翠山荘（かんすいさんそう）

宗主退任後の大谷光瑞の大きな事業として「南洋」（東南アジア域）での農園経営が挙げられる。英領馬来（マレーシア）・シンガポールのゴム園、セレベス（スラウェシ）島の森林開発を経て「蘭領印度農林工業株式会社（らんりょういんどのうりんこうぎょうかぶしきがいしゃ）」を大正六年（一九一七）に設立後、セレベス島メナド近郊の別荘附属のコーヒー農園を買収し「耕雲山園」と名付けた。その後、ジャワ島に注力しスラバヤ州（東ジャワ州）の「ディユランジィロ農園」を入手した。大正十一年（一九二二）に、プレアンゲル州（西ジャワ州）ガロー近郊の高原を視察した光瑞は、農園入手と別荘建設を計画した。「スカハヂ農園」と「環翠山荘」である。主にシトロネラ（香草）を栽培しさらに香油工場が併設されている。その後、光瑞は養蚕に力を入れガロー付近の「パノラマホテル」と周辺土地を購入。別荘「大観荘」と「パノラマ農園」とし桑樹を栽培、養蚕研究所を設けた。昭和三年（一九二八）には「ラサマリ」、「チゲドク」、「マラバル」、「チヒドン」の農園が確認でき、「チヒドン」には、別荘「悠然荘（ゆうぜんそう）」の建設が計画されている。これら農園には約四十名の「大谷学生」が派遣され作業に従事した。光瑞の事業の主軸がトルコに移り昭和四年（一九二九）以降、「南洋」事業は次第に縮小していったが、光瑞の農園の流れをくむ「河田農園」の存在は昭和十六年（一九四一）頃まで確認できる。日本人の「南洋」発展の象徴として多くの旅行者や視察団が訪問している。（加藤）

大正14年頃の環翠山荘（『大谷光瑞アルバム』）

個人蔵

環翠山荘内部の集合写真

大谷光瑞による農園経営事業の一つとして建設された別荘、「環翠山荘」で撮影された写真である。建物の内観を知ることができる数少ない資料である。集合写真には、光瑞を中心に廣瀬了乗らの顔が見える。了乗は、光瑞が農業事業のために設立した「蘭領印度農林工業株式会社」調査部の主任であり、政治外交の調査研究と人材養成を任されていた。

写真の人物全員を特定することはできないが、光瑞や了乗らが写っていることから、蘭領印度農林工業株式会社の関係者による集合写真の可能性が高く、環翠山荘が光瑞と社員らの交流の場所になっていたと推測される。その点からすると、集合写真は、当時の光瑞の農業事業の様子を伝える資料としても貴重であると言える。

同荘は光瑞の着想による建築で、本屋は総てヤシの毛皮で葺き、壁は竹を編んだ網代、床は籐張り、主材はチーク、床下は直径五十センチもある大木で支えられた高床式であった。チクライ山を西に望む高原に位置し、気候は涼しく眺望は絶景で、光瑞は夏に避暑に同荘を訪れた。

（加藤・大木）

浴日荘（よくじつそう）

関東州大連郊外周水子（遼寧省大連市甘井子区）の丘上に設けられた別荘で、平面構造は、三角形の角を円形とした「蛤型」でドーム風の特異な外観をもち、地下一階・地上三階建である。また平屋の学生宿舎（甲号）、作業員宿舎（丙号）も併設されている。建築プランは大谷光瑞の発想によるもので、「涅槃経」から想を得たという。同荘と類似したプランは、城始著「旅順大谷邸新築に就いて」として昭和八年（一九三三）に『建築と社会』誌上に紹介されている。

敷地は十一町歩（十一万平方メートル）あり「大谷授産場」が設けられ「満州の邦人農業が成功するには、農業を副業と考え、農業加工を本業とせねばならぬ。」という光瑞の構想のもとに、農産物の加工や毛織物（ホームスパン）等の実地指導者の養成が行われた。

昭和九年（一九三四）十月に落成の園遊会が催された。当時の旅行書には「小丘上に見ゆる鳥籠のやうな高楼」と紹介され大連の名所に数えられたが、昭和十五年（一九四〇）頃に売却されたようである。藤山雷太（ふじやまらいた）（実業家）、石井柏亭（いしいはくてい）（洋画家）が訪問し手記を残している。

（加藤）

竣工時の浴日荘（『皆山なかアルバム』）

「浴日荘」名入り磁器皿（右）
昭和時代
磁器
径一六・〇×高さ一・六
大谷記念館蔵

「浴日荘」名入り陶器鉢（左）
昭和時代
陶器
径一〇・五×高さ四・七
大谷記念館蔵

大連の浴日荘にて使用されたと思われる白磁色絵中皿と陶器小鉢が、大谷記念館に伝わる。中皿の表には、本願寺下り藤が赤絵で描かれている。これは、大谷光瑞専用特注の原稿用紙と同様である。皿の裏面には、高台内に赤絵にて「浴日荘」と書かれ「白川製陶製・白雲陶器」及び「富士山」絵のロゴマークが入る。

有田等の日本独自の白磁いわゆる、青みがかった淡い青白磁の様な地肌とは、些か類例を異にしている。真白よりもどちらかというと、些かクリームがかった色である。瀬戸で昭和十三年（一九三八）に「日本工業」が白川陶器にてコーヒー碗を製造していたと伝わり、特定は難しいがおそらくこれが、この皿にあたる可能性が最も高いと推測され、大谷光瑞の特注品であることは間違いない。

光瑞は、健啖家として知られるが、美食も、素食も同様に喜んで食したことが伝わる。この中皿に何をどのように載せて食していたのか、想像するに興味深い。今一個は、同じく高台内に「浴日荘」の字型が入る陶器小鉢である。何処で焼成されたかは、不明であるが瀬戸系か。

これらは光瑞の最後の秘書、吉田せつによって大谷記念館に寄贈されたが、彼女によればこれら二点は、光瑞が浴日荘より持ち帰り、別府市鉄輪の大谷別邸で晩年まで使用されたとのことである。

（掬月）

逍遙園

台湾南部の高雄市大港埔（台湾高雄市新興区六合一路五五巷内）に建設された別荘で、二階建の和洋折衷式である。天井は網代編みとし応接室・食堂を二階に設ける等、高温多湿な気候に配慮している。三方に池を巡らし、時局を反映しコンクリート製の百人収容の大防空壕と数十人収容の家庭用防空壕を一階に備えている。また内装には、日本から数寄屋建築の棟梁が招かれ指導にあたり、各部に伏見三夜荘から取り寄せた部材が配された。さらに各部の意匠に「飛雲閣」との共通点が指摘されている。大谷光瑞は昭和十年（一九三五）には高雄に土地購入と別荘建設を企図し、昭和十四年（一九三九）に大港埔の土地を正式に入手している。昭和十五年（一九四〇）に開園式を催し官民を招待した。周囲に一万二千坪（四万平方メートル）の農園と学生宿舎、農機具倉庫等があり、約三十名の「大谷学生」が起居し水稲やパパイヤ・マンゴー等の熱帯植物の栽培に従事していた。昭和十七年（一九四二）に作家の富沢有為男、浅野晃、大宅壮一が訪問している。光瑞は同年三月に帰国以降台湾の地を踏むことは無く、同年五月に「大谷学生」が賜暇休暇で帰国しておりその後の消長は不明である。戦後は、接収され軍病院関係者の宿舎となったが、現在は高雄市により歴史建築に指定され日台の専門家の手で修復が進められている。

（加藤）

昭和15年頃の逍遥園（『大谷光瑞アルバム』）

築地本願寺（つきじほんがんじ）

大正十二年（一九二三）九月一日に発生した関東大震災により、築地別院では明治三十四年（一九〇一）に再建された本堂が全焼する。大正十三年（一九二四）に「特別会計帝都教線拡張費並ニ築地別院建築費補助予算案」成立、大正十四年（一九二五）十月七日に「本派本願寺帝都復興事務所」が設置される。昭和五年（一九三〇）に築地別院再建の消息が発布され再建は本格化する。設計は東京帝国大学名誉教授伊東忠太（いとうちゅうた）（一八六七～一九五四）の印度式建築に決定する。昭和六年（一九三一）七月地鎮式、同年十月に起工式が行われ、昭和九年（一九三四）七月に工事は完了する。施工は東京帝国大学で伊東忠太の門下生であった松井角平（まついかくへい）が率いる松井組（現松井建設）が担当した。松井家所蔵の築地別院史料に起工式の写真があり、最前列に伊東忠太が設計者筆頭として立礼している。また昭和五年（一九三〇）五月に設計が始まり同年十二月までに五百点余の設計図面が作られたことが判明する。図面には築地別院の姿図が二案存在している。両案の相違は外観にあり、第一案の中央棟と左右翼棟は伝統的な本瓦葺本堂になり、両翼は入母屋屋根の破風をみせて、全体を従来の仏堂建築とする。第二案は中央棟の屋根を印度仏教式ドームになり、中央に蓮花を浮き彫りとし、頂部は尖塔になり宝珠を載せる。両翼の尖塔はボロブドゥール風塔屋になり鐘楼になる。第二案は大谷光瑞の構想と伊東忠太の建築観が一致したものである。平面計画は中央棟と左右翼棟を、中庭を介して廊下で接続する。中央棟の二階に本堂を置き、一階は納骨堂になる。左翼棟は一階に説教所、二階に大会議室、後方に門主室が置かれる。右翼棟は一階に事務室、二階に応接室、輪番室の構成になり、多機能型の建築構成である。構造は鉄骨鉄筋コンクリート造。重要文化財。

（菅澤）

昭和9年（1934）7月完成時の外観写真（松井建設提供）

現在の築地本願寺外観写真（築地本願寺提供）

三　大谷光瑞の執筆活動

大谷光瑞は、その生涯を通じて、執筆活動を精力的に行った。特に宗主退任後は、数多くの著述を後世に残している。執筆活動は、著述するだけに留まらず、著述を企画して刊行する出版事業にも及んでいる。光瑞の姿勢は、常に社会に向けて、執筆を通して発信を続けることを大切にしていたと思われる。また、光瑞自身、執筆を続けることが、自らに与えられた役割のように考えていたかもしれない。

大谷光瑞（おおたにこうずい）の著書（ちょしょ）

『見真大師』　大正十一年（一九二二）上海大乗社刊　縦二二・一×横一五・一
『観世音菩薩』　昭和四年（一九二九）大乗社東京支部刊　縦一八・七×横一二・七
『維摩経講話』　昭和九年（一九三四）大乗社刊　縦一九・一×横一三・五
『大谷光瑞師自筆ノート樺太総覧』　昭和六年（一九三一）自筆　縦二六・二×横二〇・三
『臺灣島之現在』　昭和十年（一九三五）大乗社刊　縦二二・七×横一六・五
『熱帯農業』　昭和十七年（一九四二）有光社・大乗社刊　縦一九・一×横一三・六
『花』　昭和六年（一九三一）大乗社刊　縦一九・一×横一三・五
『食』　昭和六年（一九三一）大乗社刊　縦一九・一×横一三・五
『光瑞縦横談』　昭和十一年（一九三六）実業之日本社刊　縦一九・一×横一三・三

大谷光瑞は、その生涯の中で、実に数多くの著述を残している。例えば、『見真大師』・『観世音菩薩』・『維摩経講話（ゆいまきょうこうわ）』のような宗教者としての著述、地理学者・農学者としての見識から著された『臺灣島之現在（たいわんとうしげんざい）』・『大谷光瑞師自筆ノート樺太（からふと）総覧』・『熱帯農業』、植物学の視点から著された『花』、食文化について取り上げた『食』、新聞紙上に連載された時事論を編集した『光瑞縦横談』などがある。今回の展示で出陳した著述は、全体のごく一部に過ぎないが、これらだけでも、著述の量は言うに及ばず、分野が多岐に渡っていることを示している。

宗主を辞任した光瑞は、ジャワやトルコ、台湾などで農事事業に注力し、実業家として多方面で活動する。そして、その活動の土台となっていたのが、多岐の分野に及ぶ深い知識であったことが、これらの著述から裏付けられる。（大木）

四　実業家・研究者 大谷光瑞

大谷光瑞は、多方面の学識を持つ博覧強記の人であったが、大正三年(一九一四)五月宗主辞任後、シンガポール、ジャワ、トルコ及び台湾で農業を主体とした起業を行っている。大正五年(一九一六)、シンガポールのゴム園に始まり、セレベス島のコーヒー園、ジャワ島のシトロネラ園、トルコのブルサでの養蚕・絹織物・染織、アンカラでのバラ園・香水製造を試みている。いずれも現地で会社を設立して経営に当たった。また、二楽荘や台湾の逍遥園でも果樹等を栽培していたことも知られ、このような、起業、農業などの他、都市計画、出版事業、そして教育、考古学、梵語への関心や造詣が深かったことも特筆すべきである。

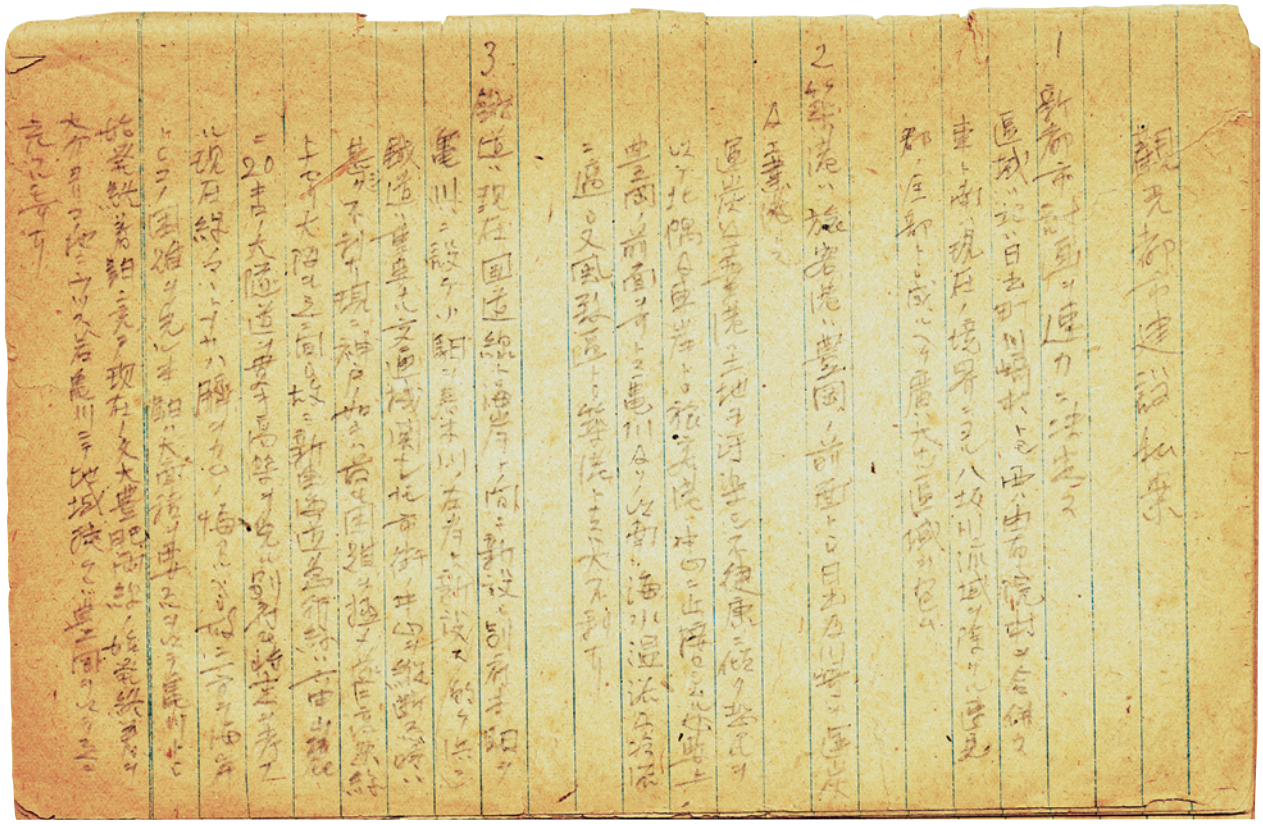
都市計画

大谷光瑞は、自ら関わった地域の地形、自然、歴史、産業、鉄道、観光、施設などを詳細に調べ上げ、その地域の将来性と発展策について論考した。二楽荘の位置した阪神間において昭和五年（一九三〇）に「阪神大築港論」、「京阪神経済都市確立論」、昭和十七年（一九四二）「神戸大港都建設論」を提唱した。また、終焉の地である別府市では昭和二十二年（一九四七）に「別府観光都市建設私案」を展開した。

さらに、中国においては、昭和十四年（一九三九）に政治、港湾の整備、水利、鉄道整備、農業などの将来計画「興亜計画」を提示し、広くアジアの将来性を展望した。この計画の中で、中国からトルコへの鉄道網の整備計画案は圧巻である。

（和田）

大谷光瑞考案の欧亜連絡鉄道網の計画図（『大谷光瑞興亜計画』第４巻）



「観光都市建設私案」

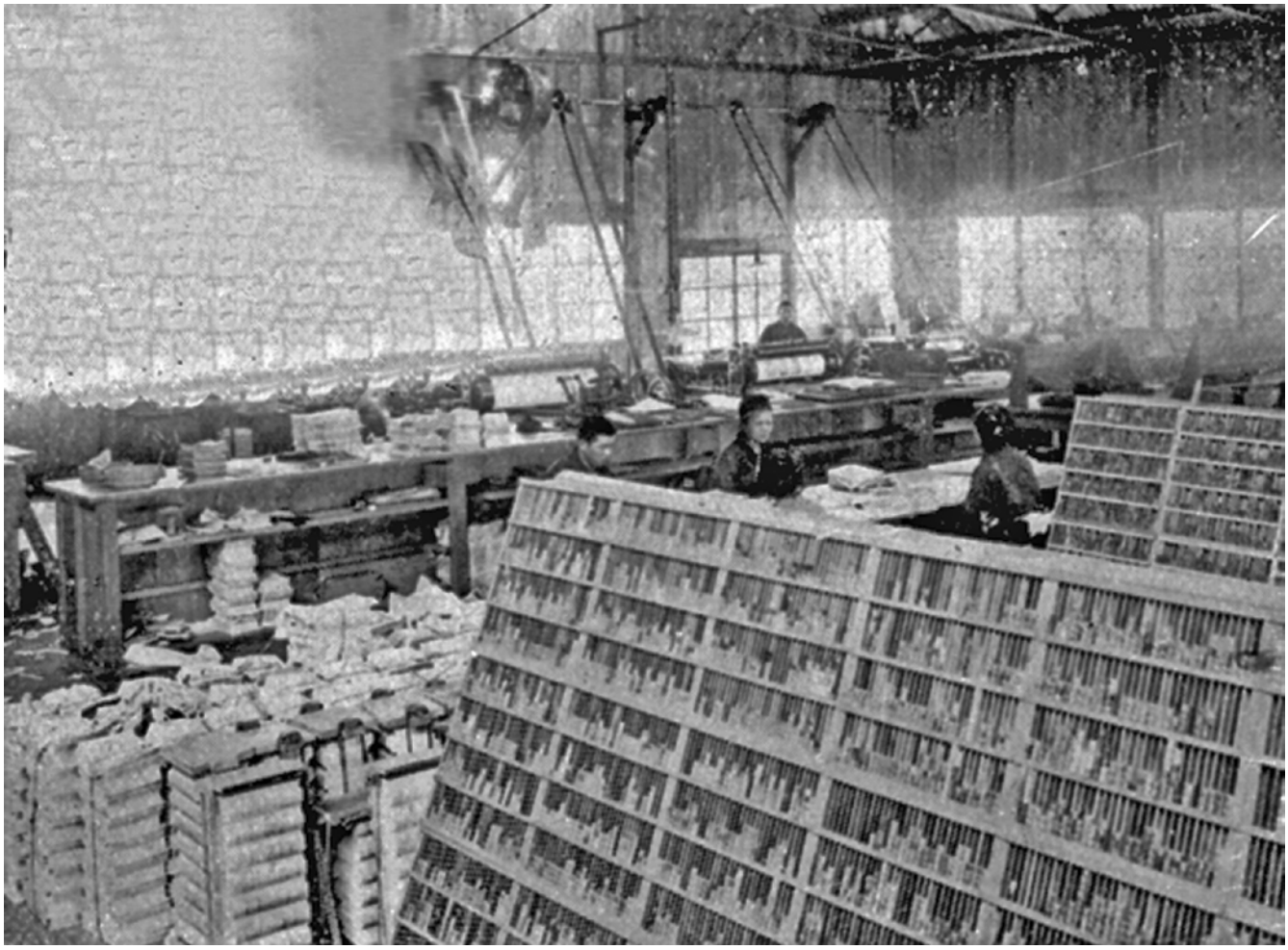
昭和時代
紙本
縦一三・八×横二〇・八

昭和二十二年（一九四七）五月末、大谷光瑞の療養先である別府市鉄輪に見舞い表敬した第十代別府市長脇鉄一に渡されたのが、別府の将来の発展のために私案された「観光都市建設私案」（光瑞述）であった。光瑞はこの私案を基本に別府市議会でも演説を行った。そして、光瑞が遷化した後、脇市長は昭和二十五年（一九五〇）に「別府観光温泉文化都市」建設法を制定し、この私案に基づき実現可能な項目を順次施行していった。この私案は三十二項目にも及び、別府の自然や経済、産業等あらゆる環境を知り尽くした光瑞の別府への思いが感じ取れる。（和田）

出版・印刷へのこだわり

鏡如宗主時代に西本願寺から出版された写真帖や自著、宗主辞任以降の書籍を見ると、光瑞は出版や印刷に関してこだわりを持っていたことが分かる。後世に伝え残そうと、当時最新の印刷技術であったコロタイプ印刷を採用し、さらに書籍の背、表紙やその他の部分には、インド、中央アジアから発掘した資料から引用したと考えられる文様などを巧に挿入している。

コロタイプ版印刷は、写真の階調を忠実に再現でき、製作者の意向を最も正確に反映できる印刷技術である。そして、字体にもこだわり、中国唐の書家、欧陽詢（おうようじゅん）の楷書の書体を好み、自らの名刺や書簡のサイン、漢詩にも欧陽詢の書体を似せている。（和田）



二楽荘印刷部の内部（『二楽荘写真帖』大正2年版）

『大無量寿経義疏』の紙型

大正時代
紙本
縦三七・三×横二六・三

紙型とは、活版印刷用の鉛版を作る時の原型となる版である。紙型となる紙は、特殊な薄い紙を重ね固めた用紙のことを言う。『大無量寿経義疏』は二楽荘印刷部で印刷された冊子である。そして、刊行までには技術、校正上で多くの問題を抱えていたようで、「印刷上非常な困難と苦心が伴うた本書は他と比較して一種風変りの立派なものであった」と苦労の末に刊行の運びとなった思いを、印刷担当の関露香（関貢米）は述べている。また、印刷に携わっていた武庫仏教中学の学生であった大村（榎原）徹郎は、本書の校正刷の一部を、二楽荘内の含秀居（大谷光瑞居間）から印刷所まで運び込んだ思い出を綴っている。なお、龍谷大学には武庫仏教中学の教本となった『簡易仏教講義録』の紙型も保管されている。

（和田）

二楽荘絵葉書の写真凸版

大正時代
銅製（基部木製）
縦八・二×横一三・五

絵葉書を製作する時の写真凸版である。完成品は二楽荘本館とテニスコートが写る構図の絵葉書である。写真凸版は銅板や亜鉛板に感光材を均等に塗布し、撮影したネガを密着させて焼き付けて、現像、焼き込み、腐食の工程を経た版のことである。二楽荘に関連した写真凸版は、西本願寺にも保管されている。西本願寺には絵葉書用の写真凸版や、活字と組み合わせて組版にできる含秀居、植物、温室内部、メロンなどの写真凸版が保管されている。二楽荘の関連写真の写真凸版は、当時の印刷技術を考える上で重要な資料である。また、これらの写真凸版は二楽荘印刷部で製作されたと考えられる。

（和田）

印刷された絵葉書

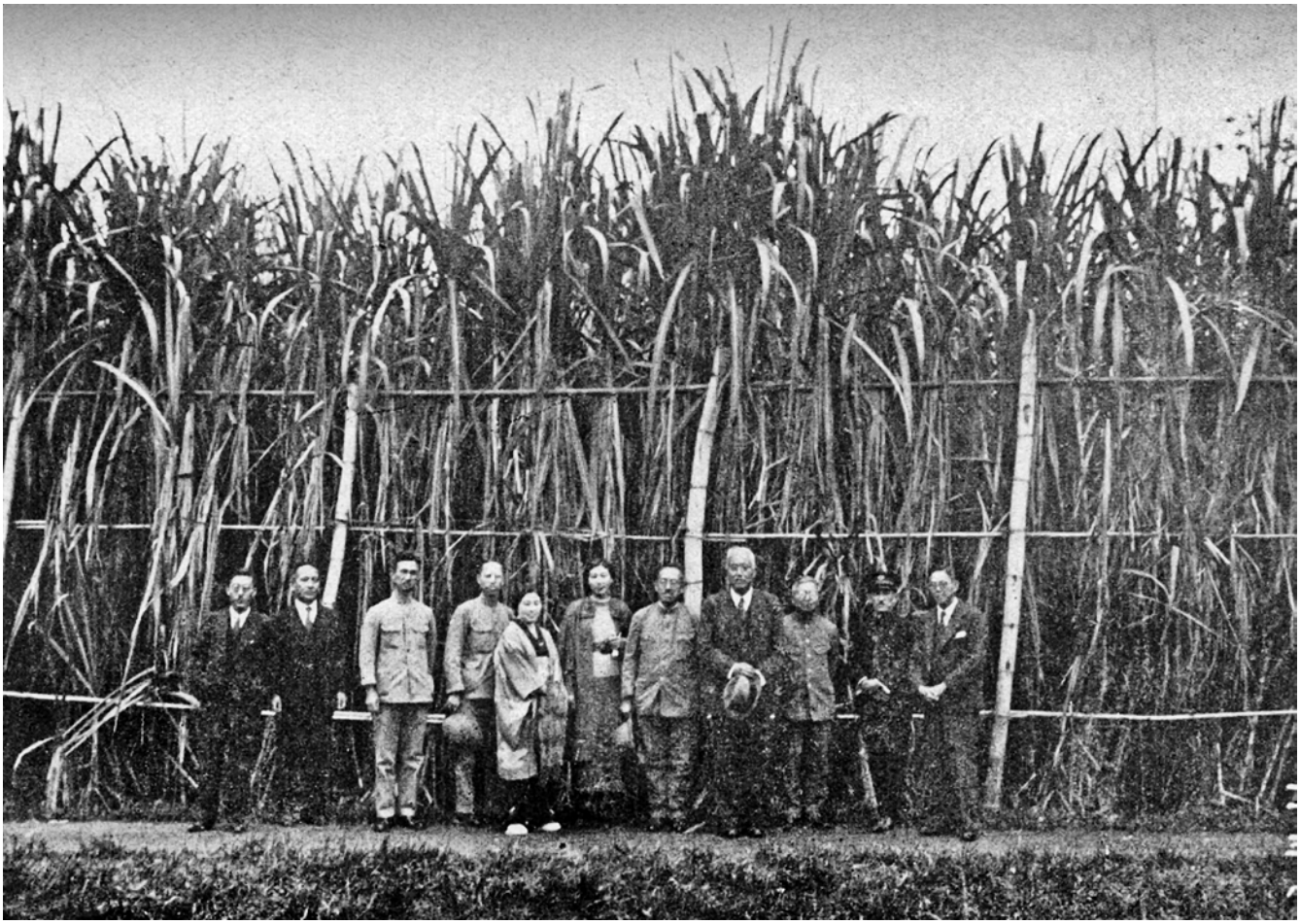
農事者

大谷光瑞は、大正三年（一九一四）五月の宗主辞任後、自己の職業を「農業」とし、シンガポール、ジャワ、トルコ及び台湾で農業を主体とした起業を行っている。

大正五年（一九一六）、シンガポールのゴム園に始まり、セレベス島のコーヒー園、ジャワ島のシトロネラ園、トルコ・ブルサでの養蚕・絹織物・染織、アンカラでのバラ園・香水製造を試みている。その地域で栽培されてきた特産物や地域の天候・特性などを活かした農産物の選定などに深い学識を持っていた。特に、「臺灣島（たいわんとう）は我帝國の如意寶珠（にょいほうじゅ）なり。その欲する所に従ひ、地に産せざるなし」（『臺灣島之現在』）とあるように、「熱帯農業」への関心が深く、昭和十四～十五年（一九三九～一九四〇）に刊行された『大谷光瑞興亜計画』第六～第九巻に収載された「熱帯農業」は農学者・光瑞の見識を示す大著となっている。その中には、以下のように記される。

「国民全部の信頼を熱帯に置かしむるに非ざれば将来に於ても食料の安全を確保する能はず。不肖興亜意見を策するに当り、食料の確保に熱帯農業を挙ぐる所以なりとす。（中略）最有利なる熱帯を有効に使用するは農業者の任務なりとす。」

最近、龍谷大学農学部において『熱帯農業』第三章「土壌」に収載される「熱帯農業の奥義」に記された立体農法の実証的研究が実践されつつある。（三谷）



昭和11年台湾屏東の砂糖園視察（『大乗』第15巻第5号）

三夜荘の養蜂道具

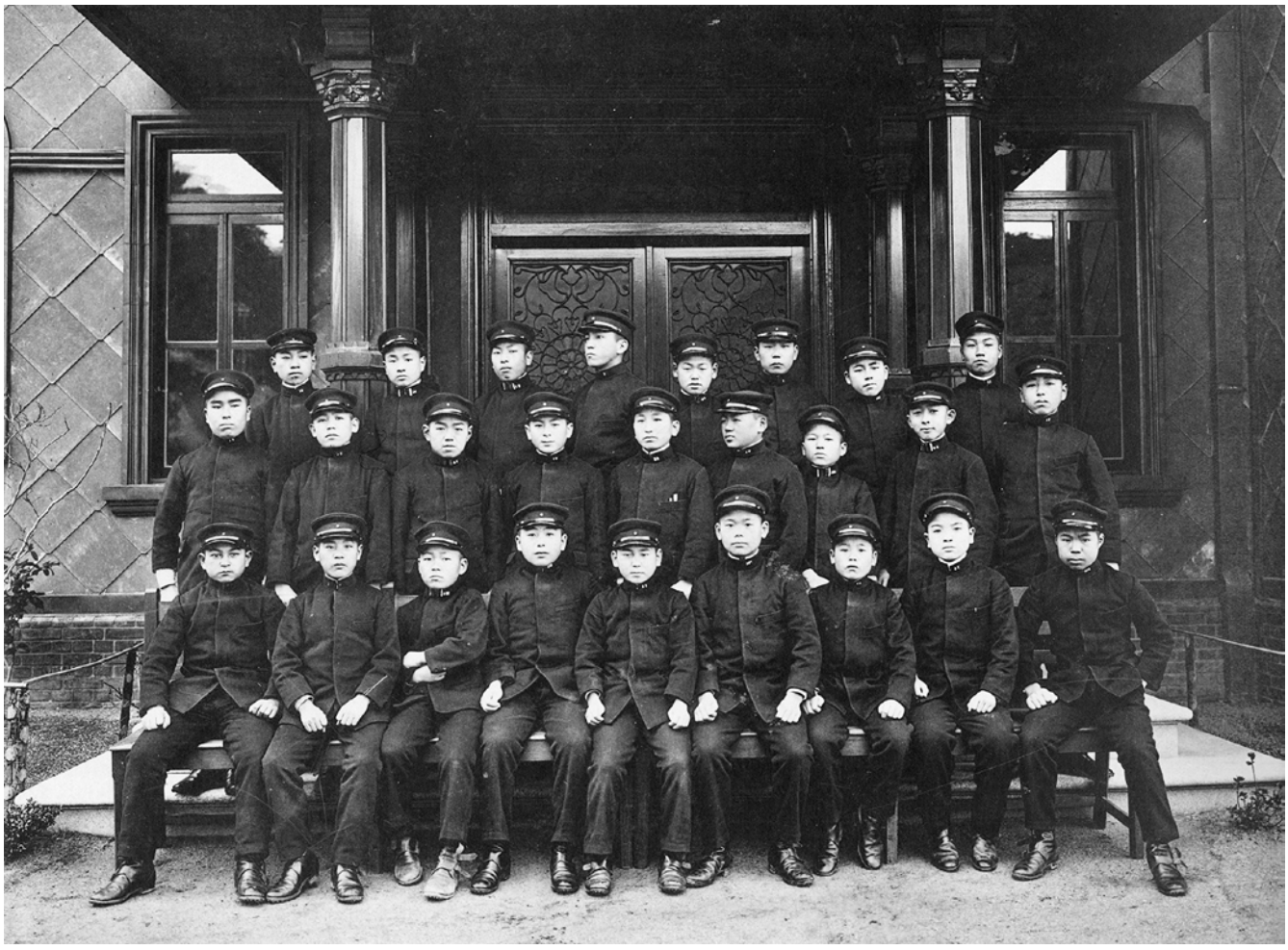
大正～昭和時代
巣　箱　木製　縦二七・〇×横二二・〇×高さ一五・五
燻煙器　鉄製　縦一七・〇×横一〇・五×高さ二三・〇

大谷光瑞は、ジャワ島において大正末期に養蚕を試験的に実施し、日本からも専門技師を招聘している。しかし、当該地での養蚕業は、蚕の発育と桑の発育が一致しない自然環境と運営面で採算が取れなく事業化を断念したと言われている。さらに同時期、光瑞はトルコにおいて政府と共同し製糸、織物業に乗り出している。昭和八年（一九三三）に制作された第二十三世勝如宗主の七条袈裟（円窓内に花鳥、蓮華、孔雀を織り交ぜた文様）は、大谷学生が自ら養蚕した絹糸で仕上げられていると言う。

一方、養蜂については、大正期に関東庁農事試験場に蜜蜂を光瑞が寄贈したことや上海無憂園で行なわれていた記録がある。日本において光瑞は、各地の養蜂や養蚕関連の施設の視察に赴き、伏見の三夜荘において養蚕、養蜂の研究を進めた。その状況を知る資料が、三夜荘の床下に保管されていた養蜂や養蚕に伴う道具類である。図版に見る養蜂の道具は巣箱、巣枠、巣礎、燻煙器である。かつて三夜荘は桜の名所として有名で、開花時期を利用した養蜂が試みられたと考えられる。この内の燻煙器は大正十二年（一九二三）に上海の無憂園内大乗社から刊行された井尻進『ボロブドゥル』の裁断前の版下で梱包されていた。また、養蚕に伴う飼育用の蚕箔は、三夜荘二階の屋根裏に並置され利用されていたと言う。（和田）

教育者

大谷光瑞は、明治四十四年～大正三年（一九一一～一九一四）に神戸六甲の二楽荘内に武庫仏教中学を開設したほか、大正七年～昭和十六年（一九一八～一九四一）にかけて、「大谷学生」と呼ばれる学生を独自の方法によって選抜し、中国、旅順や台湾、高雄において教育した後、世界各地に派遣した。旅順策進書院では、授業科目として「西力東漸史、東洋史、独乙語、農業、地理、英語、オランダ語、数学（代数幾何）、漢詩、仏教概論、西洋史、経済学」があり、光瑞自身も自ら教壇に立って「西力東漸史、東洋史」を指導した。旅順策進書院から高雄逍遙園までの大谷学生数は、瑞門会の会員名簿によれば、合計二三八名であったと言う。（三谷）



武庫仏教中学策進団幹部員（『二楽荘写真帖』明治45年版）

皆山（かいやま）なかアルバム

大正～昭和時代
紙本
縦一八・二×横二六・〇他
皆山三商店（京都）蔵

皆山家は、代々西本願寺の紙関係を扱う商家（皆山三商店（かいやまさんしょうてん）・皆山三郎右ヱ門（かいやまさぶろうえもん））であった。その関係から、皆山なか（大正八年生）は京都府立第一高等女学校（現京都府立鴨沂（おうき）高等学校）在学中から、大谷家の別邸であった伏見の三夜荘に行き来していた。そして、昭和九年（一九三四）に大谷学生として入学した。入学した当初から「女子学生七人組」と呼ばれたようで、大谷光瑞から付けられたニックネームは「らくだ」であった。アルバムには三夜荘での様子が窺える多くの写真が綴られている。また、皆山なかは光瑞が各方面に視察に行く時の随行者の一人でもあり、築地本願寺や大連周水子の浴日荘に訪問した時の写真もアルバムの中に散見される。（和田）

「大谷学生」関連の制服と付け襟

大正時代
麻地
制服 着丈六四・〇×袖丈五四・〇
付け襟 径一一・五
光立寺（山口）蔵

大正三年（一九一四）に二楽荘を退去した大谷光瑞の随行の一人として上海、インドに渡航した武庫仏教中学の松尾善英（明治三十一年生）が着用した制服と付け襟である。松尾はインドでマラリアに冒され発熱した時、光瑞に背負われた。その時のことを「猊下におんぶされたのは、わし一人だ」と自慢していたと言う。その後、大正六年（一九一七）に南洋ジャワ島に光瑞が設立した蘭領印度農林工業株式会社の商業部で活躍し、光瑞の命により九條武子の夫、九條良致を大正九年（一九二〇）ロンドンのケンブリッジ大学に迎えにも行く。その間は西本願寺の室内部で執務をとり、昭和九年（一九三四）築地本願寺に転務する。「大谷学生」とは、二楽荘にあった武庫仏教中学から継続され、光瑞から教育を受けた学生のことである。旅順策進書院で開校された第一期の講師陣には堀賢雄や廣瀬了乗、そして松尾も加わっていたものと考えられる。

（和田）

旅行用鞄（大谷光瑞使用）

明治～大正時代
革製
縦四七・〇×横五二・〇×高さ三五・〇
光立寺（山口）蔵

松尾善英が大切に保管していた革製鞄で、鞄の上面や側面には「TAJIMAHAL PALACE HOTEL」（BOMBAY）等の旅行先での施設のラベルが貼り付けられている。また上面中央にイニシャルと考えられる「K.O」（大谷光瑞）が白色で記されている。

（和田）

考古学者

大谷光瑞は中国古陶磁研究の中で、陶磁器を単なる骨董的な視点から離れ、詳細な遺物観察から派生する型式論や編年学へとつなげ、様式、文化論に展開しようとした。これは、まさに考古学的研究の手法であった。

かつて、明治、大正期の日本における中国古陶磁器の研究は、骨董的な観点や文献史料から、その存在を論証するに留まっていた。しかし、光瑞は文献史料の検証と共に、実物の資料を基本に陶磁器の器形、文様、製作技法、胎土など様々な要素を考え、文献史料による研究の限界を超え、中国古陶磁研究をさらに発展させた。

日本では、遺物の層位学的検出方法の実践や型式学方法の導入によって、縄文土器の編年体系の骨組みが確立しようとしている時期であった。このような背景の中、光瑞は実物の遺物を中心に、当時の日本の考古学研究に遅れることなく、中国古陶磁を追究したのである。

（和田）

大谷探検隊による新疆スバシ故城の発掘風景（大正2年5月）

陶器破片（小笠原彰眞資料）

中国・南宋時代（十二～十三世紀）
陶器
陶器ケース　縦二三・五×横二三・五

大谷光瑞の中国古陶磁器の研究において、上海別院輪番であった小笠原彰眞（明治二十九年生）は光瑞の命で、杭州の鳳凰山付近に遺存すると考えられていた南宋官窯（郊壇下窯）の調査を実施し、昭和五年（一九三〇）二月二十五日に郊壇下窯の遺存を確認した。調査には、光瑞が中国古陶磁研究の師と仰ぐ中尾万三の「注意書」を携えて踏査に臨んだと言う。発見した時の様子を「私の腰をかけた處こそ窯跡も窯跡、窯の焚口であったのには思わず奇聲を発したことであった。破片一千余を得て凱旋を奏したがこれを先生（中尾万三）に知らせた時ほど喜ばれたことはなかった」と回顧している。郊壇下窯とは中国・南宋時代（一一二七～一二七九）の都であった臨安（現在の浙江省杭州）に設置された、宮廷専用の製品を生産する窯、いわゆる「南宋官窯」の一つである。小笠原は、二楽荘にあった武庫仏教中学を卒業した人物で、同期生には廣瀬了乗、花山信勝、森瀬雷城等が在籍していた。

（和田）

表面

裏面

陶器嵌め込み扁額（中尾万三資料）

中国・宋時代（十～十三世紀）
陶器
縦九三・〇×横三九・〇
個人蔵

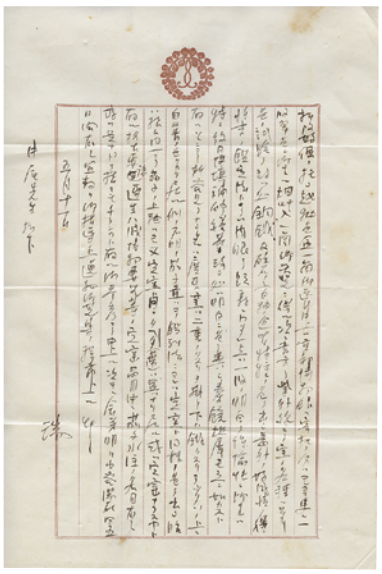
大谷光瑞の多才さは、陶磁器にも及び、『支那古陶瓷』の解説は実に微に入り細に入る。殷、周の古陶に始まり、唐、宋、元を経て明、清に至る解説は、昭和初期の当時としても一流であるが、現在に至るも少々の時代の限界はあるが、殆ど遜色がないといっていい。自身のコレクションについても「不肖ハ定窯ヲ愛セリ」の北宋官窯皿や、南宋官窯の郊壇下窯の陶片、龍泉窯青磁鉢に及ぶ。

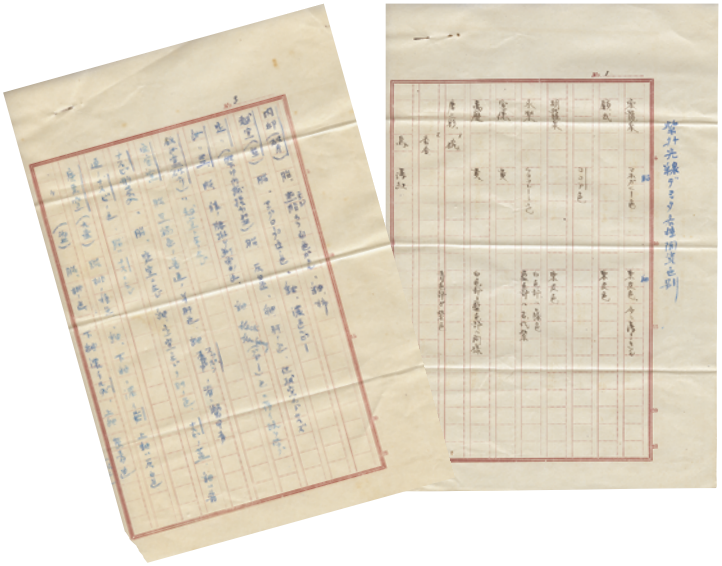
ここに本草学者、中国陶磁器研究者である中尾万三博士（一八八二～一九三六）の旧蔵せる宋青磁陶片がある。中尾博士は当時中国陶磁研究の第一人者で『支那陶磁源流考』等の著作があり、『支那古陶瓷』に深く関わり、その監修的存在であった。

中尾博士の旧蔵したこの「汝窯陶片」は些か複雑である。光瑞が人を使って発掘した汝窯址（河南省）から採取されたと思われる、陶片には「赤い窯変」があり、現在これらは、汝窯片とは言い難く、同じく河南省内で焼成された後代の鈞（均）窯陶片と考えられるのである。ところが『支那古陶瓷』では、「不肖ノ有セル汝州窯跡ノ破片ノ如キハ（中略）藤花紫ノ如キ、無花果紫ノ如キ幾多ノ色アリ。又、青中ニ紫紅色、紅色ノ変色ヲナセルアリ。一概ニ天青ヲ以テ論ジ去ル能ハズ。」としているのである。現在、北宋汝窯と見られる伝世完器は公的に七十数点が認識され、そのいずれも、いわゆる「紫紅色・紅色」の窯変は見られず、汝窯に比して多大の完器を伝世する鈞窯にこそ、この窯変が見られるのである。

二十一世紀に入り、汝窯をはじめ中国陶磁の新たな研究が展開しているが、現在汝窯址発掘のこれらの鈞窯的陶片は、臨汝窯といわれる民窯か、あるいは汝窯盛期をやや下った時代、いわゆる金・元あるいは明代に汝窯にて焼成されたと見なしてよいであろう。

（掬月）





大谷光瑞書簡（おおたにこうずいしょかん）

昭和四年（一九二九）五月十一日
紙本
縦二四・〇×横一六・〇
個人蔵

伏見の三夜荘で記された中尾万三宛の書簡である。肉眼観察で疑義の持たれる中国古窯陶磁の識別について、紫外線において各陶磁が発する独特の色調によって、客観的に古窯を特定する方法を探り出したことが記されている。そして、この書簡に同封されていたのが、大谷光瑞述としてまとめられた「紫外光線デミタ各種陶瓷色別（とうじしきべつ）」の表である。この紫外線判別法については、『支那古陶瓷（しなことうじ）』においても、「鑑賞」として一項目を設け、その有用性が述べられている。

（和田）

『支那古陶瓷（しなことうじ）』

昭和七年（一九三二）四月十日
紙本冊子
縦二六・一×横一八・九

本書は、帙装丁（ちっそうてい）に本文、図版目録並びに解説書をまとめた和装本と、別紙図版（原色版二十五葉、コロタイプ版十二葉）から構成されている。本文は、夏、殷、周時代の陶器から清、中華民国に及ぶ陶磁器を系列的に概説している。本書は、大正期の中国陶磁研究を、科学的かつ考古学的な側面からさらに一歩進めた、大谷光瑞の中国古陶磁研究の集大成であった。光瑞は本文「鑑賞」において、「眞品の破片は、古瓷の度量衡なり」と破片の重要性を指摘し、破片の肉眼観察と共に顕微鏡観察、そして紫外線による色調観察を併用することによって、資料の真贋と窯の比定が可能になると述べている。さらに、大型の破片や完形品から器種、器形を考慮し、より正確性を高めることを強調した。この書は中国古陶磁の研究上、研究史に終わることなく、現在でも通用する内容を有している。

（和田）

地理学者

龍谷大学は、大正三年（一九一四）から大正十一年（一九二二）にかけて冨山房から『佛教大辭彙』全三巻を刊行する。大谷光瑞の指示による宗祖六五〇回大遠忌法要記念の『真宗大辞彙』の編纂が機縁となっている。完成した刊本は、大判の石版刷りの複数の地図と多くの写真図版（コロタイプと網版）を挿入した異例の辞典であった。編纂当時の地誌学・地理学・地図技法の粋を凝縮したものとなり、光瑞の的確な指示があったものと考えられる。光瑞と地誌学・地理学への邂逅については、明治三十二年（一八九九）からの清国巡遊の報告をイギリス王立地理学協会（The Royal Geographical Society）に行ったことを嚆矢とする。

国内においては、明治四十一年（一九〇八）十月の旧図書館開設に際して光瑞自ら印度地誌である〝The Imperial Gazetteer of India〟全二十四巻を寄贈し、大学図書館における基本文献の充実を示した。同地誌は、イギリス・オックスフォードで明治四十年刊行されたばかりであり、多色印刷の地図を挿入した当時の印度地誌・地図の決定版といえるものであった。

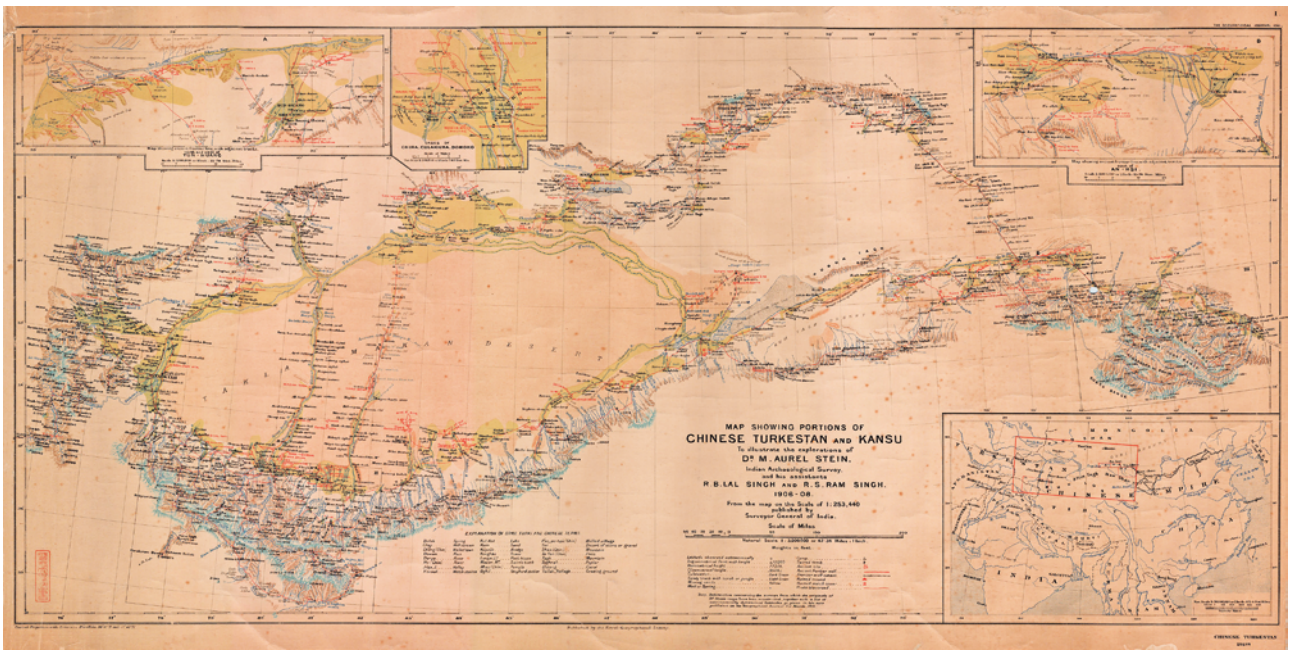
続く、明治四十一年十一月には、光瑞の尽力により東京地学協会招聘のヘディンの講演が、東京・京都で行われた。

京都の講演では、京都帝国大学と協力し、地理・地誌の特別展観が行われ、ヘディンの〝Through Asia Central Asia and Tibet.〟はじめ七著書と山岳、湖沼図、見取り図含む百八枚の稿図が出陳された。さらに各国の探検隊による中央アジアおよび西蔵探検報告二十二編、この中には、今回展観する J.L. Dutreuil de Rhins の Asie centrale（Thibet）や明治四十年のスタインの Ancient Khotan（地図部分のみ展観）を含み、地誌については、清代の徐松が記した西域水道記をはじめとして多くの漢文刊本、とりわけ本願寺からの出陳として龍蔵本仏国記、龍蔵本大唐西域記を始めとした現在の龍谷大学図書館を代表する多くの地誌学分野の貴重書の展観がなされた。

ここから、伝統的地誌学の造詣を基本とする、近代的地誌・地理学および地図に対しての深い関心が見て取れる。

（岡田）

イギリス・ブライトンでの大谷光瑞　26歳（明治34年（1901）8月22日）



A

シルクロード踏査地図（A・B）
Chinese Turkestan and Kansu Kun-Lun Range Chinese Turkestan

Aurel Stein作製　一九一一年刊　A図 縦四一·三×横九四·八　B図 縦三五·五×横六一·八

オーレル・スタイン（一八六二～一九四三）が、The Royal Geographical Society の学会誌〝The Geographical Journal, Vol. 37, No. 3. (Mar., 1911)〟pp. 275-280. に、〝Note on Maps Illustrating Dr. Stein's Explorations in Chinese Turkestan and Kansu〟と題して寄稿した報告書中の地図。タクラマカン砂漠を中心とした地図（三〇〇万分の一）と、崑崙山脈を中心とした地図（一〇〇万分の一）。地図中には、明治三十九年（一九〇六）から明治四十一年（一九〇八）にかけての踏査ルートを赤色実線で、赤字で遺跡が記されている。

（岡田）

中央アジア地図（C）
Asie centrale（Thibet）

Asie centrale (Thibet)
J.L. Dutreuil de Rhins著　一八八九年　フランス・パリ刊
縦六〇·〇×横八九·九

十九世紀末の中央アジア地図　地理学者、地図製作者のJules Dutreuil de Rhins（一八四六～一八九四）は、先にベトナムの地図を作成し、さらにFernand Grenard と共にホータン、中国領トルキスタン、モンゴルそしてチベットにいたるルートを開拓した。

中央アジア地図は、大谷探検隊第二次・第三次探検隊踏査のロプ・ノール地域を記載しており、法顕（実線）、玄奘（一点鎖線）、シャー・ルフ（英文表記：Shah Rukh 2本実線）、マルコポーロ（二本実線）のルートも記載されている。

（岡田）

第二次・第三次大谷探検隊踏査地図（D）
SKETCH MAP ILLUSTRATING A PORTION OF THE TAKLA-MAKAN AND LOB DESERT (1911-1912)

橘瑞超作製　大正七年（一九一八）二月二〇日　The Royal Geographical Society
縦六〇·〇×横六〇·〇　個人蔵

The Royal Geographical Society に、大正七年（一九一八）二月二十日提出された地図。

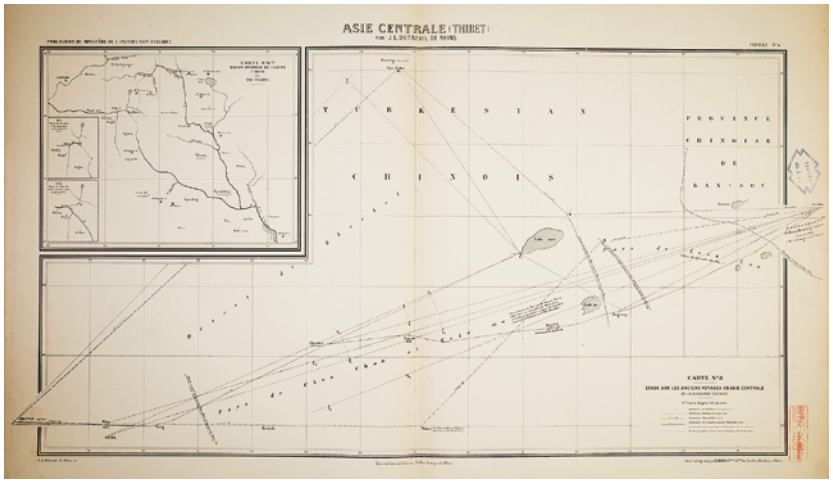
大谷光瑞著の『旅行教範』には「角度・方位ハ厳ニ羅針盤ニヨリ記シ遠距離ニ在ル山脈ハ目測ニヨリ大凡距離高度」との記載がある。本地図には、同指示に対応する報告が多くみられ、寒暖計と風向計による計測結果を一日単位で青色インクで記載している。

地図の記載事項〝SYMBOLS〟として、丘や山などの顕著な地形特徴だけでなく、植生や河川、湖についての記載、気象について五段階に示すなど、探検隊踏査地図として精緻な記録である。

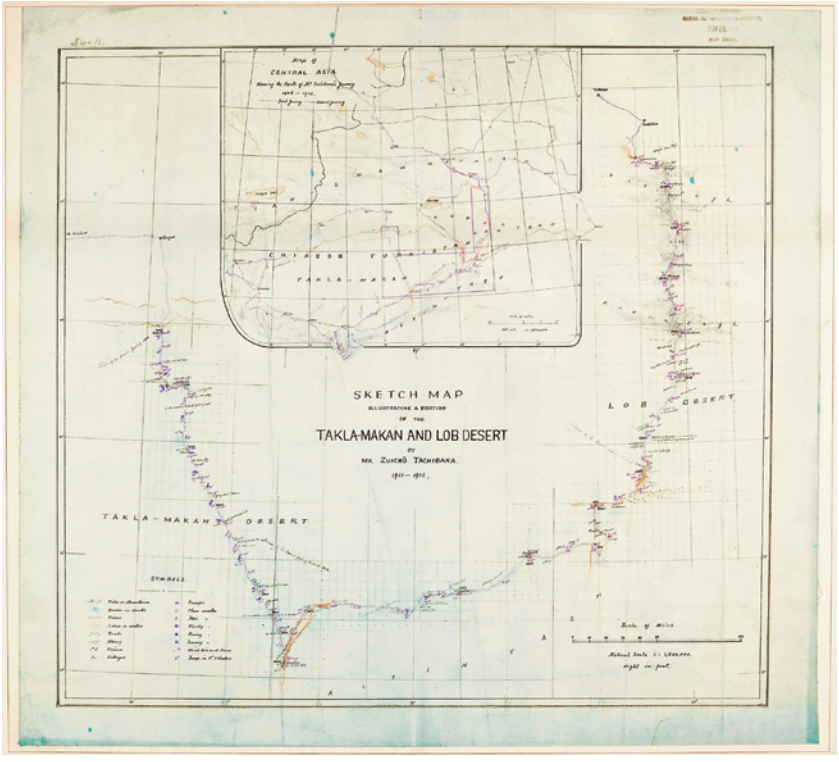
（岡田）

Map showing portions of
KUN-LUN RANGE,
CHINESE TURKESTAN,
to illustrate the explorations of
Dr M. AUREL STEIN
and his assistants
R.B. LAL SINGH AND P.S. RAM SINGH,
Survey of India,
1906-8.
From the map on the Scale of 1:253440
published by the
Surveyor General of India.
CHINESE TURKESTAN

B


ASIE CENTRALE (THIBET)
TURKESTAN
CHINOIS
PROVINCE CHINOISE DE KAN-SOU
CARTE N°2

C


Map of CENTRAL ASIA
CHINESE TURKESTAN
TAKLA-MAKAN
SKETCH MAP
ILLUSTRATING A PORTION
OF THE
TAKLA-MAKAN AND LOB DESERT
BY
MR. ZUICHŌ TACHIBANA.
1911 – 1912.
LOB DESERT
TAKLA-MAKAN DESERT
SYMBOLS.

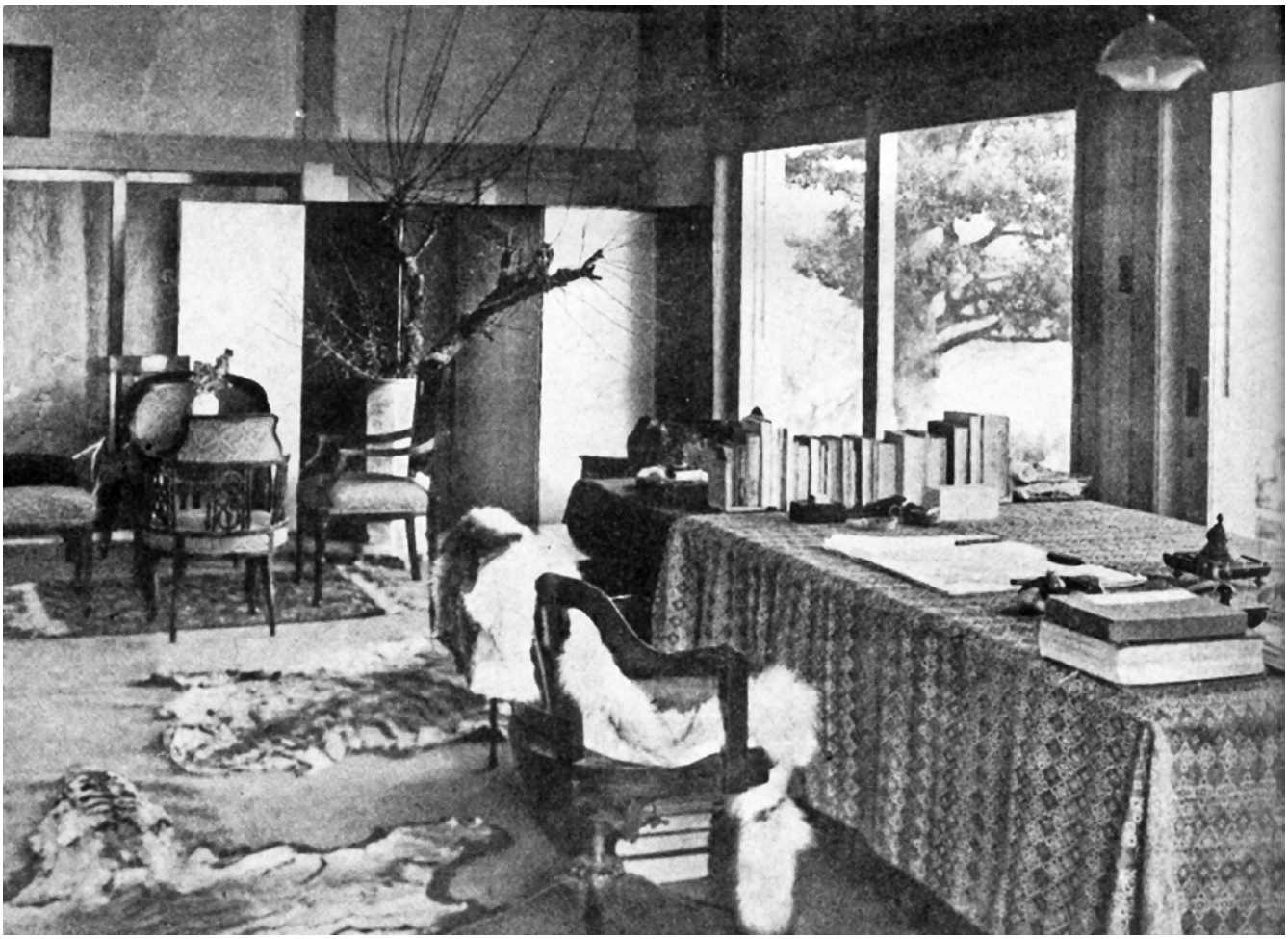
D

梵語研究者

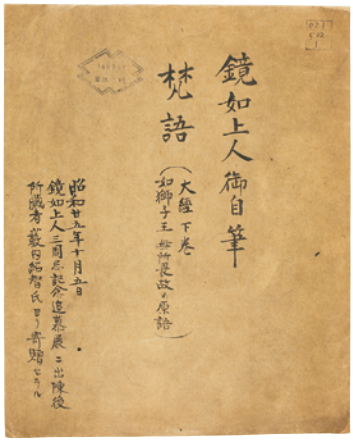
大谷光瑞は、従来の伝統的仏教学に対して、最先端の文献学的研究方法として、特にサンスクリット語（梵語）典籍の読解研究の重要性を見出していた。サンスクリット語聖典の翻訳研究を目的として、大正八年（一九一九）に「光寿会」を創設し、「梵文無量光如来安楽荘厳経」、「梵文邦訳金光明最勝王経」、「梵文邦訳入楞伽経」などの日本語訳や、「大薩遮尼乾子所説経」、「不空羂索神変真言経」、「大方広仏荘厳経」など多くの講演録を出版している。

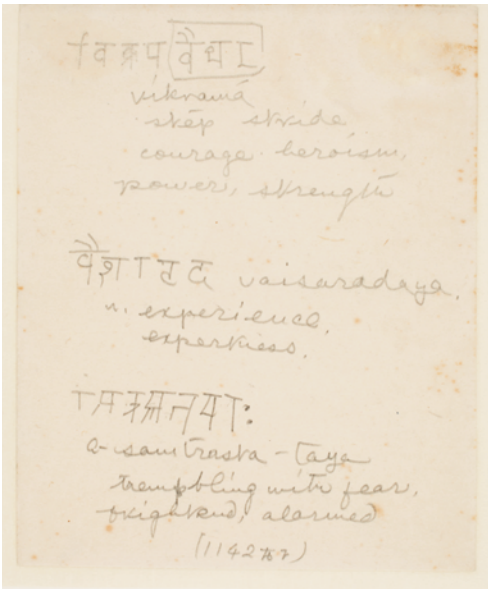
サンスクリット語のほか、チベット語訳やウイグル語訳など多くの言語の翻訳仏典（特に浄土三部経）に関しても関心をもち、青木文教や橘瑞超らの先駆的業績が特筆される。

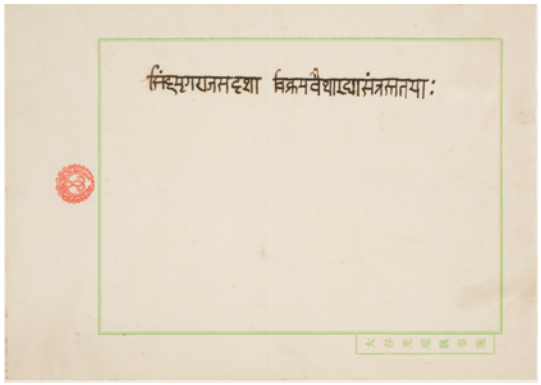
（三谷）

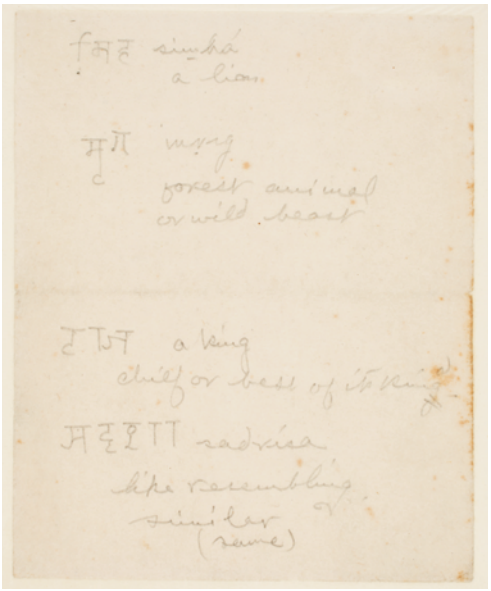


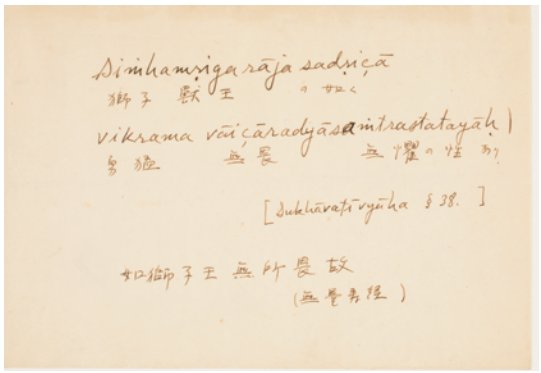
三夜荘の大谷光瑞書斎（『大乗』第10巻第1号）











鏡如上人御自筆梵語（きょうにょしょうにんごじひつぼんご）

大正～昭和時代
紙本（四通台紙貼付）封筒一点
台紙 縦二六・五×横一九・三
封筒 縦三二・八×横二六・六

本資料は、梵字（サンスクリット文字）のみ記したもの（大谷光瑞執事箋）一通、そのローマナイズ一通、語義を英文で記したメモ二通からなる資料である。封筒には、下記のような記載がある。

「鏡如上人御自筆
梵語（大経下巻　如獅子王無所畏故の原語）
昭和廿五年十月五日
鏡如上人三周忌記念追慕展ニ出陳後
所蔵者藪内紹智氏ヨリ寄贈セラル」

siṃhamṛgarājasadṛśā vikramavaiśāradadyāsaṃtrastayāḥ

獅子　獣　王の如く　勇猛　無畏　無懼 の性あり

漢訳『無量寿経』巻下の該当箇所が「如獅子王無所畏故」と記載される。大正蔵の該当箇所は、第十二巻、二七四頁上段二九行目である。

特に浄土真宗において所依の経典である「浄土三部経」のサンスクリット本の発見と研究に情熱を傾け、多くの著作にその学識が反映されている。本資料は、その過程で得られた知見によって書かれたメモであろう。

（三谷）

三夜荘での歌会

大谷光瑞の父・明如宗主（大谷光尊）時代から、伏見の三夜荘ではよく歌会が披講されていた。宮内省御歌所寄人の阪正臣や大口鯛二を迎え、題者（歌題の提出者）、点者（判定者）、講師（和歌を読み上げる者）、読師（進行役）、発声（節を付けて歌う役）、講頌（第二句から合唱に加わる者）、奉行（歌会のまとめ役）に分かれ本格的に行われた。歌会の記念として三夜荘で撮影された集合写真には、大口鯛二を中心に参加者が写り込んでいる。

ところで、鏡如宗主は、詞藻に富み和歌に秀でた父・明如宗主七回忌の時に、大口鯛二に依嘱して明如宗主の和歌千数百首を選び『六華集』上下二巻を刊行した。今回の展示では、三夜荘での歌会に参加していた松下観雅の短冊資料を紹介する。

（和田）

三夜荘での歌会の集合写真（照恩寺蔵）

三夜荘歌会関係者の短冊

明治～昭和時代
紙本
各縦三六・三×横六・一
祐西寺（京都）蔵

伏見の三夜荘の歌会に参加していた一人、松下観雅（明治四年生）の自坊である祐西寺の寂静閣文庫には、歌道に秀でた観雅を物語る詠歌や歌会に関わった人たちの短冊が大切に保管されている。明治二十八年（一八九五）、観雅は祐西寺第十一世住職を継承し、西本願寺奉仕局室内部員や仏教大学（現龍谷大学）講師も歴任した。宗学はもとより歌道、梵唄、茶道に才を発揮し、生涯の詠歌の数は八百余首に及ぶと言う。

（和田）

『歌のしたかき』・『詠草』

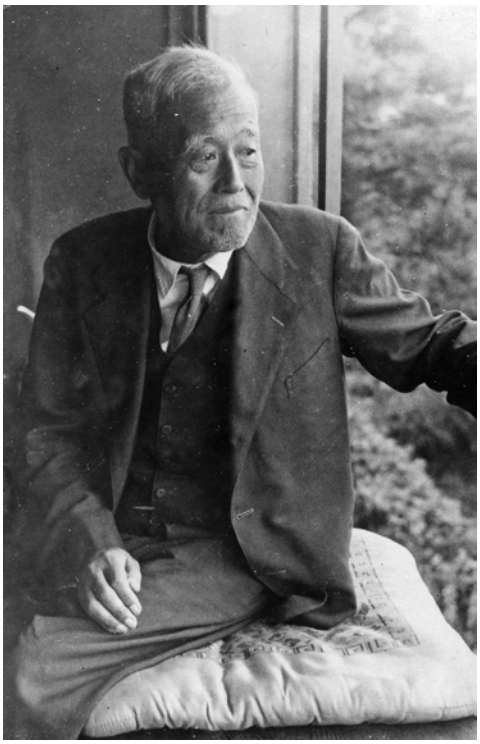
明治時代
紙本和綴
各縦一三・一×横一九・〇

上原芳太郎の自詠和歌の草稿である。上原芳太郎（明治三年生）は光瑞の幼少期からの近侍で、後に西本願寺室内部長を務め、「本山の歴史、慣例等に精通する第一人者」と評された人物である。『歌のしたかき』始頁には和歌の題目「栽梅　明治四十一年」と記されている。朱書きで添削した多数の自詠和歌の他に大口鯛二、大谷武子、松下観雅、痴山義亮等の和歌も記されている。また、三夜荘で披講された歌会の題目「春風」や題目「高山植物」に対する質疑内容も綴られている。上原の号は「清陰」、「夢山」と称する。

（和田）

大谷光瑞肖像写真　60歳（昭和10年）
『臺灣島之現在』巻頭写真より
『臺灣島之現在』の校正中の築地本願寺居室（現貴賓室）にて撮影された写真。

大谷光瑞肖像写真　27歳（明治35年）
イギリス・ロンドン留学時の大谷光瑞
明治35年8月15日に帰路を利用し西域、印度へ仏蹟探検（大谷探検隊）に出発。



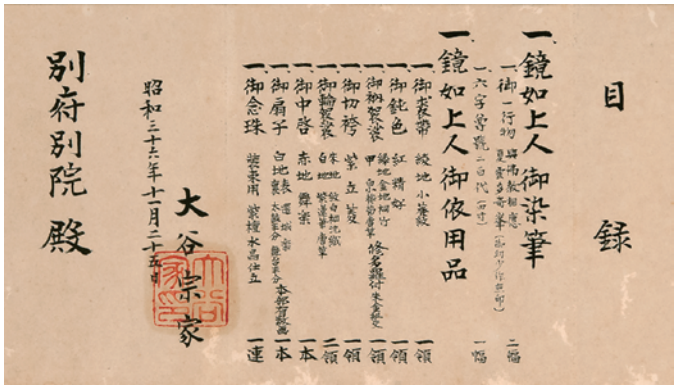
大谷光瑞肖像写真　72歳（昭和22年）
大分県別府市鉄輪で静養する大谷光瑞。
昭和23年10月5日遷化。

大谷光瑞肖像写真　46歳（大正10年）
大正11年には上海の無憂園が落成し、「光寿会」の本部が置かれた。そして、雑誌『大乗』が創刊した頃の写真。

七条袈裟・横被・修多羅

明治時代
絹地
七条袈裟 縦二二〇・一×横一二五・〇、横被 縦一六六・〇×横四二・五
修多羅 縦二二一・〇×横一六・五
大谷記念館蔵

鏡如宗主が着用した法衣である。七条袈裟の縁は、金通し仕上げで桐（紫色）と竹（白色・紫色）を組み合わせ、甲の部分（甲地）は、大型の白・葵色の菊花文と、菊花文を取り巻くように唐草文が配されている。特に地文は段染めによって仕上げられている。菊花文の花弁にはダルマ糸が使用され、花弁に厚みを持たせ立体感を表出している。花弁の縁取りは平金仕上げである。現在の浄土真宗本願寺派の服制は、明治四十一年（一九〇八）の鏡如宗主の時に改正された「服装規則」が基礎となり、七条袈裟を最高の礼装とした。（和田）



目録

一、鏡如上人御染筆
一、鏡如上人御依用品

別府別院殿

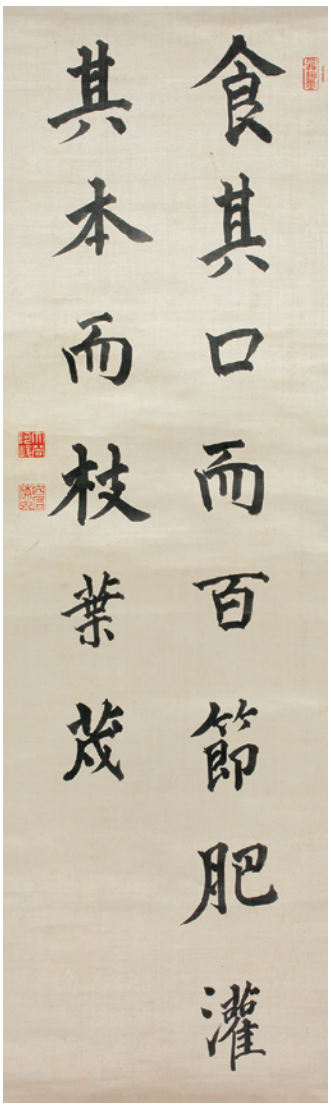
大谷宗家

昭和三十六年十一月二十五日

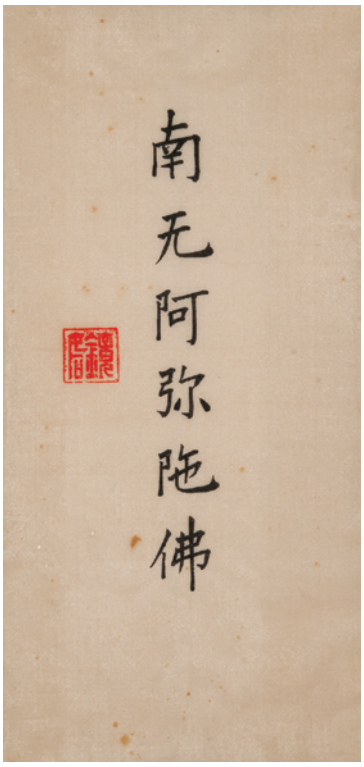
大谷宗家寄贈目録

昭和時代
紙本
縦二二・〇×横五三・〇
大谷記念館蔵

昭和三十六年（一九六一）十一月二十五日に大谷宗家から大分県の本願寺別府別院に、鏡如宗主の御染筆や御依用品が贈られた時の目録である。大谷光瑞は別府市鉄輪の地で遷化し、別府別院本堂において通夜が営まれた。その由縁もあり、本堂に分骨が安置され、毎年十月三日～五日に「鏡如忌」の法要が修行されている。別院境内には大谷光瑞を顕彰する大谷記念館あり、遺品や大谷探検隊の資料が公開されている。（和田）



①



②

大谷光瑞書（おおたにこうずいしょ）

①明治十八年（一八八五）筆　縦一八一・五×横四九・三
②明治三十六年～大正三年（一九〇三～一九一四）頃筆
縦六七・〇×横三三・三
大谷記念館蔵

①は、大谷光瑞十歳の頃、前漢の学者である劉向（りゅうきょう）（前七九～前八）が編纂した前賢先哲の故事説話集『説苑（ぜいえん）』第十六巻の一節を墨書したものである。落款には、長方形朱字「乙酉翰墨」（乙酉＝明治十八年）方形白字「大谷阿峻」（光瑞の幼名峻磨（としまろ））とあり、幼少期の書であることが分かる。幼少期の光瑞は、『孝経』などの素読や、西本願寺の要職を歴任した水原慈音（みずもとじおん）（一八三五～一九〇八）による草書の手本を以て書法を学んだとされている。

②は、光瑞の書による浄土真宗の本尊である六字名号「南無阿弥陀仏」である。この書の「陁」は「陀」ではないが、これは本願寺第八世蓮如の筆意を意識したものと思われる。印は「鏡如」であることから宗主時代（二十八才～三十九才）の書とみられる。光瑞は、楷書は欧陽詢（おうようじゅん）（五五七～六四一）、行書は、顔真卿（がんしんけい）（七〇九～七八五）に私淑した。欧陽詢は、唐代の学者・書家で初唐の三大書家、あるいは楷書の四大家と呼ばれている。光瑞の遺墨は、多くは残されていないが、その殆どが楷書であり「今陽詢」と言っていい。（掬月・大木）

大谷光瑞作水鳥形陶器

大谷光瑞作
昭和十六年（一九四一）
陶器
縦三・八×横一一・三×高さ五・八
個人蔵

大谷光瑞は、中国の古陶磁器に強い関心を持ち、現物資料を収集し、自らも作陶し調査研究に注力した。そして、その集大成として『支那古陶瓷』を残した。

この資料は、光瑞が制作した水鳥形の陶器であり、底部には「瑞」の文字が彫られている。光瑞の最後の秘書役と言われる吉田せつが記した来歴によると、昭和十六年（一九四一）四月、京都（市）陶磁器試験場（国立陶磁器試験所　大正九年改称、統合）に新設された高熱炉を見学した折りに試作した陶器と記されている。また、この陶器は、晩年を過ごした別府時代に、普段使いとして使用していたことも記されている。

光瑞自身が陶磁器を研究する中で、実物を収集し、技法などを含めて自ら試作するという実証的立場を貫いたことを知る資料である。加えて、この陶器を普段使いとして使用していたことから、愛着のある一品であったと思われる。（和田）

大谷光瑞常用湯呑

昭和時代
磁器
径九・五×高さ七・三
大谷記念館蔵

有田香蘭社製の湯呑である。蘭の茎、葉が染付で、花が釉裏紅で描かれている。釉裏紅とは、なじみの薄い技法である。いわゆるポピュラーな上赤絵ではなく、透明釉の下に使われる下赤絵である。中国では、唐代にその作例が始まり元代に盛んになり、続く明代、清代にかけて一般化した。又、朝鮮半島では、高麗青磁から用いられた。釉裏紅はあざやかな上絵と違って、淡いピンク色に発色する。有田では、磁器焼成のかなり早い時期にこの技法が試されたが、多くは生産されず、一般化するのは、江戸後期である。この湯呑は、香蘭社に過去の商品サンプルや、明治以降のデザイン帳に類例がなく、大谷光瑞の特注であったことが知られる。製造時期は、高台内の蘭染付マークにより第二次世界大戦前後と推察される。

光瑞は昭和二十二年（一九四七）五月、大連から引き揚げの後、別府市亀川国立別府病院（旧海軍病院）に一時入院した。数カ月にて退院の後、別府市鉄輪の加藤称司の経営する旅館『ときわ屋』離れに住んだ。加藤の子息、加藤正義がこの器を後に記念館に寄贈した経緯がある。彼によるとこの器は、日本茶はもちろんのことコーヒー、紅茶、ミルクなどの万能の器として光瑞が発注し、用いられたようである。（掬月）

七　映像展示

二楽荘と大谷探検隊

平成二十六年十月
約十分
龍谷大学理工学部製作

龍谷ミュージアムの特別展「二楽荘と大谷探検隊」で公開された映像記録。ガラス乾板による大谷探検隊の軌跡から、二楽荘本館ＣＧ復元に至るまでの報告。二楽荘本館においては、その設計図面として新たに発見された手書き平面見取り図と、多くの写真記録が基本資料となるが、通常の建築物としての付近見取り図や建物の平面図、立面図、断面図が欠落している。幸いにも、二楽荘本館について、多くの写真記録から既に精緻な建築外観摸型が作成されている。

二楽荘本館の外観形状は、この摸型の計測データを活用することから始める。次に建物内部の精緻な三次元復元のためには、建物の正確な平面図とともに、主要な部屋については原色版絵葉書に残る画像を解析し、三次元復元を試みた。回廊や英国近代室などモノクローム写真にのみ記録された箇所については、コンピュータによる推定彩色を試みた。

大正元年（一九一二）十月二十八日の大阪毎日新聞の三面に以下の英国近代室取材記録が掲載されている。「（前略）歩を英国近代室に転ずると、特に花やかな色彩が感情をソソルに堪えぬ、室は漸う一六坪、真四角な小房ながら、窓は思いのまま高く、壁はエメラルド・グリーンのような薄緑に塗り潰され（後略）」以上の彩色情報によるＣＧ再現を行った。（岡田）

鏡如宗主の五七日法要

昭和二十三年十一月八日　西本願寺・大谷本廟
約十三分
浄土真宗本願寺派蔵

鏡如宗主は昭和二十三年（一九四八）十月五日、別府市鉄輪（かんなわ）の地で遷化した。そして、本願寺別府別院本堂にて仮葬儀が営まれ荼毘に付された後、遺骨は西本願寺に帰山した。五七日の通夜の勤行は黒書院で厳修され、藪内家による献茶の儀の後、十一月八日大谷本廟において厳粛に法要が勤められた。当時の『本願寺新報』には法要の参列者が約三〇〇〇人と記されている。

映像には、遺骨が西本願寺に帰山し、黒書院での法要から大谷本廟での葬儀の様子が映し出されている。当時の法要風景を知る上で貴重な映像である。

（和田）

龍谷大学大宮図書館　二〇一八年度特別展観
大谷光瑞師遷化七〇年記念

大谷光瑞師の構想と居住空間

開催期間：二〇一八（平成三十）年十月三日㈬～十月十三日㈯・十八日㈭

二〇一八（平成三十）年十月三日発行

編　集：龍谷大学大宮図書館

発　行：龍谷大学大宮図書館
〒六〇一-八二六八　京都市下京区七条通大宮東入大工町一二五―一
電話（〇七五）三四三-三三一一（代表）

共　催：龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター
龍谷大学 龍谷ミュージアム

制作・印刷：株式会社図書印刷 同朋舎

本書の全部または一部を無断に転載、複製することを禁じます。
©2018 龍谷大学大宮図書館

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY